特101
255

現代百科文庫

宗教叢書

第七編

前島潔著

耶蘇基督

始

特101
255

百科文庫發刊の辭

社會の各方面に亙りて、名高い書物や面白い作品を小册子にして提供する。

現代知名の方々に依頼して、なる可く平易簡易に書いて貰き度ければ、体裁よく製本し度い。

種目は、哲學叢書、宗教叢書、教育、科學、文藝思潮、政治經濟及び機械、偉人傳、問題叢書等の十餘種に分ち、更に各種に亙りて、成る可く代表的のものを選び續々發刊する。

大方の諸氏、幸に愛讀の榮を給へ。

大正三年九月

日月社白

大正
4. 1. 11
内交

宗教叢書發刊の辭

從來の宗教書類は概して教訓的に傾き、若しくは學究的に偏し過ぎてゐた。其結果、特殊の信者や專門の學者には好都合であつたが、一般の讀書界には難解で緣遠いものであつた。やゝもすれば讀者に反感を起さしめ、或は嗜はず嫌ひの惡感を起さしむる餘弊さへあつた。然るに最近社會の變遷と、知識欲の進歩は各方面に開展して宗教上にも平明な解釋と新らしい說明を要求するに至つた。

弊社は、玆に鑑みる所あり、既成宗教の經典や。聖賢の思想言行を最も新しく最も平明に解釋し、更に古今の名著と偉人の言行から特に宗教味に富むものを選出して、廣い意味新らしい意味の宗教書類を編成しようと思ふ。

かくして、既成宗教を現代的に生かし、現代的の思想及藝術から、宗教味を闡明し、以て聊か新時代の宗教を闡示し度いと思ふ。

かゝる趣旨に基き、玆に時世に適合せる宗教書籍を一般讀書界に提供する。大方の諸賢から公平なる批評を希ひ度い。

大正三年九月

編輯者白

耶蘇基督

前島潔著

はしがき

基督傳は私にとつて畢生の仕事でありまして、今の處私の知識は基督傳に關する如何なる點が西洋に於て論爭せられつゝあるか、隨つて如何なる問題が將來に研究さるべきかと云ふ位の事に止ります。されば或る親切な人から此の叢書に現るべき基督傳執筆の相談を受けました時も其場で卽答が出來なかつたのでありまし。併し私も此の方面の學問をし、また現に讀書しつつある身分として、通俗的なものとの註文を全然受け

耶蘇基督

目次

第一章　耶蘇の時代……一―一三
第二章　耶蘇の生涯……一三―八八
降誕及び少壯時代――洗禮と試煉――初期のガリラヤ傳道――
初期のユダヤ傳道――施洗者ヨハネの最後――盛時のガリラヤ
傳道と十二使徒の選定――耶蘇教説の眞意――耶蘇の反對者と
北方への退却――カイザリヤ・ピリピに於けるペテロの信仰告
白――ヘルモン山上の變容貌――耶蘇の上京及びペレア傳道
――第二期ペレア傳道とラザロの蘇生――反對黨の決議と耶蘇

三頭政治若しくは共和政體は帝政と變ぜられ、國勢大に揚がり、治政を見ること四十五年、版圖大に擴がり、地中海を中に湛えて、歐洲、亞細亞、阿弗利加の三大陸に跨り、威令の及ぶ所何億方里なるを知らずと云ふ有樣である。試みに地圖を展べて見るに、地中海の東岸、南に亞剌比亞の曠野を控へ、北スリアを經て小亞細亞地方に連る一小地方がある。此の地方こそ世界史上に於て最も特殊の民族的發達を遂げた猶太民族の故國で、卽て乳と密との流るゝイスラエル國民約束の地である。併も當時猶太國は既に獨立を失ひて羅馬帝國領となり、スリア總督の下に統轄せられてゐた。而して總督の下にあつて專らユダヤ及びサマリヤの地方を治むる者に方伯(つかさ)がある。テベリオ・カイザル(アウガスタスの子紀元十四年位に卽く)在位の十五年ユダヤに赴任したるポンテオ・ピラトは卽ち其れである。斯くて基督降誕より其の公生涯に入る迄の三十年間は侵々たる羅馬の威權勢力がパレステナ地方に益々重きを加へて行つた時代である。加ふるに圓形劇場に殘忍なる闘

技を好んで觀たりし彼等羅馬人は、其の屬領地を治むるに決して寬厚でなかつた。我等は羅馬人が誰彼の差別なくユダヤ、サマリヤの被征服民を迫害した事蹟を青史に讀むのである。聖書の記す所によれば方伯ピラトも殘忍な性格の人物と思はれる(路十三章一)。彼等は之等の民を罰するに十字架の刑を用ゐた。如是野蠻なる刑法は猶太律法の何處にも發見し能はぬものである。

苛政の下に在る者誰しも此の桎梏より脫せむ事を希はざるはない。況して猶太國民は古來唯一大能神の選民なりてふ自負を持ち、救主觀念なる特殊の思想を抱き、之を政治的に理解して乾坤一擲世界統一の大業成るの日を待望せる國民である。彼等の或る者は神の國を「力を以て」取らんと思うた、或る者は機に臨み變に應じて自己萬全の道を見出し以て世を渡らむとした、或る者は宗教的生活の裡に隱れて世の推移を雲煙過眼視せんとした、時にまた黨を結び一揆を起して所の代官方伯に叛いたチウダの輩もあつた。我等は當時猶太國內に存したる諸黨派につ

き一瞥するも強ち無益の業ではあるまい。

サドカイ人とは猶太國の上流人士で、祭司の家門に屬する者共を謂ふのである。祭司長は彼等の占有する尊き職責である。またサンヒドリン會議なるもの彼等によつて組織せられ、羅馬管下にあつて猶ほ相當の行政的權威を揮うてゐたのである。彼等は所謂今日主義者の最たる者で、機會ある毎に自己の特權と利益を擴張する事にのみ腐心し、敢て一貫せる思想と主張とを有つてゐない。宗教は彼等にとつて第二義的の方便に過ぎない。基督を處刑したのは、基督の教ふる所彼等の思想信仰に反したるが爲めではなく、民多く彼を信じ彼に就かば、羅馬人之を目して黨を結ぶものとなし、更に苛政と壓迫とを猶太國に加へむかを恐れたが爲めである(約十一章四十八)。之に比ぶればパリサイの徒はさすがに猶太教獨特の主張を固守せる宗教的團體である。律法を守ること頗る嚴重に、彼等獨特の傳說を固守して自から最高なる宗教的生活を營む者と自負した。されど惜いかな彼等の

最高となす生活は徒らに形式に泥みて內部の生命を逸してゐる。虛飾恰も白く塗りたる墓とは彼等に對する耶蘇の評語である。自から神の律法に最も忠なりと自負して世人を輕蔑し、其の固陋・傲慢、狹量眞に厭ふべきものがあつたのである。

パリサイの徒と竝び稱せらるゝ者に學者と稱ふる一派があつた。專ら律法を研究し、會堂に於て、學校に於て、猶太教の祭司たり教師たるを以て職として居る輩である。されば彼等は當時に於ける宗教學者の權威と言ふも妨げない、浩瀚なるタルムツドは實に彼等の後繼者によりて作成された所である。

パリサイ及び學者の徒輩が政治問題に超然として專ら自己の信ずる宗教的生活の裡に一箇の安心を求め居たに反して、人民の多數はなか〳〵に羅馬人の桎梏を甘受するに忍びない。彼等は屢々黨を結び謀を構へて羅馬の羈絆を脫し、以て神の選民たる國民的待望を實現せんと志した。所謂神の國を「力を以て」取らんとする徒で、此輩を呼むで熱心黨(Zealots)と謂ふのである。十二使徒の一人なるゼ

ロデと稱ふるシモンは卽ち其の一人である。此他に、ユダヤに羅馬の方伯を見るを快からず思ひ、ヘロデ王家に加擔して此の一族をしてパレスチナ一圓の地を治めしめむと企てたヘロデ黨がある。彼等が其の起原に於て系統に於て、思想流行共に希臘文明に傾かむとせるに對して、波斯思想を傳ふるエッセネ宗の一派がある。特異なる教理を說き、禁慾的生活を送つて、直接間接に尠からぬ影響を當時の社會に與へてゐた。如是にして猶太國當時の狀勢は頗る傷心すべきものがあつた。宗門黨派區々として民何れにか適歸すべき、此の時人救主を翹望して神國の建設を思ふはまさに自然の要求である。知らず救世主は如何なる姿して來りたるか。

以上は外部に現れたる社會狀態のあらましである。然らば內部に流れたる宗教思想は如何か、猶太教は當時如何なる信仰を發揮してゐたか。

猶太教の他宗教に勝れて最も特異なる點は神を飽くまで明確に强く描き出した

事である。されど長所はやがて短所である、神の客觀的方面をのみ强く觀た結果件(くだん)の神は餘りに超越的となり、隨うて內部の暖昧を缺くの憾みがあつた。其の結果彼等は神と人との間に渡す可からざる溝渠を穿つた。既に神は遠く彼方の空に去つた、地上を支配する者は神にあらずして律法とならざるを得ぬ。斯くて舊約聖書に載せられたる成文律法は猶太教にとりて唯一の權威となつた。律法に隨ふは神の民の義務なり、此義務を果すは善なり、而して此は卽て神に對する最上の敬虔なりと、是れが彼等の主張である。かくて猶太教が宗教の域を脫して道德教に墮したるはまさに自然の歸結と謂はればならぬ。また斯くの如く律法の遂行を以て唯一の道とする時は行爲に對する動機は問はなくなる。人の救はれるは一に律法的行爲を爲したかどうかに懸つてゐる。隨つて道德的、宗教的生活を送るには先づ全律法を知つて居なければならぬ。律法研究を職責としてゐたパリサイ人者學の徒輩が、己れ最も宗教的道德的生活を送つてゐると思惟したのは此の理に

よるのである。パリサイの徒が他の猶太人に對して倨傲自から驕つた如く、猶太人はまた異邦人に對して我れ獨り神の選民なりと自負してゐた。彼等は自家本來の宗教的使命を忘れて神より國民的特權を與へられ居る者と誇想してゐた。「我等の先祖にアブラハム在り」とは彼等の誇りである。併も神はよく此の石をもアブラハムの裔(すゑ)となし給ふ事を知らないのである。既に猶太教は預言者時代の信仰を失つて弊害百出してゐる。知らず宗教改革は何人の手によつて始められむとするか。

猶太教は律法を重視するあまり形式に墮して了つたと右に述べた如くである。さりながらイスラエル民族は其の昔預言者を出し詩人を產んだ宗教的人種である。磽确たる山麓猶ほ泉を生ずる、當時猶太教の掩蓋の下にあつて、詩篇預言書を通して眞生命の流を汲む輩猶ほ尠らずあつたのである。「學者」の中にすら耶蘇によつて「汝神の國より遠からず」と宣せられたる者がゐた程である。當時の律

法學者ヒレルに就いて下の如き物語が傳はつてゐる。ある日何がしなる者彼の許を訪れて、片足にて立つ間に全律法を教へられん事を乞うた所、ヒレルは言下に答へて曰うた。

『汝に快からざる事は汝の隣にも爲す勿れ、是れ律法の凡てにして其餘は之が註釋なり』

と。またアンテゴヌスの語として傳へらるゝものに、

『報酬(むくい)を受けむとして主に仕ふる僕(しもべ)の如くなる勿れ、報酬を思はずして主に仕ふる僕の如くなれ。汝常に天を畏れよ』

なる句がある。其他當時の著作物中には基督教的精神を言表したる章句がなかなかに尠くない。『エノク書』『ソロモンの頌歌』『モーセの昇天』等は殊に然りである。所詮眞の宗教は猶太に起らねばならぬ。彼等は希臘人羅馬人に比すれば遙かに宗教に對して正しい理解を有つてゐた。神及び人の義務について正しい概念を抱い

てゐた。たゞ猶ほ學ぶべき點と矯正すべき點があつたのである。而して機は既に熟した。基督教は如何にして世に出でたるか。

由來健全なる思想は都市に存せずして村落に生長する。謙虛神を畏れ人を敬ふ美風はエルサレム學徒の群に見る事が出來ず、却てパレステナの山地牧夫農民の間に傳はつたのである。彼等は此世に於ては常に權威者から壓迫せられてゐた。されど彼等は敬虔なる心もてひたすら神に賴り、他日神は必ず壓迫者を懲し給はむと信じて疑はない。詩篇九、十、廿二、廿五、四十、六九、一〇九、等は彼等を慰むるに足るべき章句である。彼等は歌うて曰ふ、

『主よ乏しき者貧しき者の望は汝を措きて誰かあらんや、
汝は之に聞き給ふべし。
惠ふかく優しき者汝の外に誰かあらんや、
汝は惠の御手を開きて謙る者の心を慰め給ふなり。』

路加傳一章に載せられたる『處女マリアの頌』は此の思想を歌ひ出でた代表的のものである。げにユダヤの山里に住めるザカリヤの一門、ガリラヤの小村ナザレに居りしマリア、ヨセフの家族の如きは、貧しき心を抱いて「イスラエルの慰められん事を俟てる者」の好典型であつたであらう。彼等は劍をとつて神の國を強取せむとはせで、心靜かに祈禱と斷食とを以て救の至るを待つたのである。神の慰めは先づ是等の民に與へられねばならぬ。知らず、此世の慰め主は何處に來りたるか。

イスラエル國民は古來一種獨特の信仰を維持してきた。末の日至らば神は一英雄を起して諸々の邦國を滅し、エルサレムを中心としたる一大神國を建設し給はむ、其の日我等は永遠の福祉を此邦土に受くるを得べしと確信し、現在如何なる不幸を見るも國家の破滅に遭ふも、猶ほ此の信仰を捨てずに自から慰めてゐたのである。此の末の日を『主の日』と呼ぶのである。我等が舊約預言書を讀む時隨處

に此の思想が謳はれて居るのを見るであらう。其後『主の日』は一轉して、壓迫者を亡して虐げられたる者を興し、惡人を罪して義人を賞する『審判の日』と變つた。此の時曩きに義人の生涯を送つて世を去りし聖徒等は悉く再生して茲に一大神國は生じ、其の聖なる邦國は永遠に破滅の期なかるべしと謂ふのが其の時代の信仰である。之を世末的觀念（エスカトロヂカル）と稱へる、ダニエル書及び當時の著作物に於て見る思想は卽ち其れである。されど基督時代に於ては、再び豫言者時代の思想が復活し、斯かる永遠の神國に伴ふ必須條件として、先づ此の神國を來らすべき救主（メシヤ）を思ふに至つたのである。神の國は『義の王』を中心として興るべく、彼は奚主ダビデの裔（すゑ）に出で、壓迫者を亡ぼし神民を釋放して先祖アブラハム以來約束せられたる地を嗣（つ）がしめ、神の道を示して『義の王國』に處する道を示さむ「キリストと稱ふるメシヤの來らむ時すべての事を我等に告げむ」と言ふのが當時一般の信仰である。斯くてダニエル書にある『人の子』も此一個偉大なる人格者を意味する名稱と解

せらるゝに至つた。エノク書、ソロモンの頌歌を見れば此の王（キリスト）を樣々の特性を以て描いてある。知らず猶太人の救主待望は如何にして成就せられたるか。

我等は次章に於て是等の答を解かればならぬ。

第二章　耶蘇の生涯

一

我等は先づ基督降生の年代を定めればならぬ。今日一般に使用される西曆紀元は六世紀の僧デオニシウス、エキシグウスが路加傳三章一節ならびに廿三節の記

事を根據として制定したものである。蓋し羅馬帝テベリオ・カイザル在位の十五年(紀元廿九年)にバプテズマのヨハネ、ユダヤの野に獅子吼し、半年或は一年の後「イエス年凡そ三十にして福音を宣べ始めた」とすれば、我が大正三年はまさに基督降生後千九百十四年目となる。然るに福音記者マタイは我等に傳へるに、イエスはヘロデ王の治下に生れ給へる事を以てしてなる。ヘロデ王とは紀元前四年に既に世を去つた大王ヘロデの事で、其の時彼は未來のユダヤ王たる耶蘇を殺すために、ベテレヘムに於ける二歳以下の嬰兒を鏖殺したと言ふから、其督降誕は紀元前四年乃至七年の間に落ちて來なければならぬ。けれども此の路加(るか)、馬太(またい)兩福音書の矛盾した記事は下の如くに説明をつける事が出來る。卽ちテベリオ・カイザルが父王アウガスタスの死によつて王位を承けたのは紀元十四年八月であるけれど、彼は十一年頃より既にアウガスタスと共に政治を見てゐた事は歴史に明かである。されば福音記者ルカの所謂「テベリオ・カイザル在位の十五年」を此の年より數へて、ヨハネの出現を紀元廿五年頃とすれば、其の時年凡そ三十であつた耶蘇は紀元前五年に降誕した事となる。斯く考へて見ると馬太傳の記事と甘く符合するわけである。されば我等は紀元前五年を以て基督降生の年と定めて大差ないと思ふ。

耶蘇降生談は樣々の美くしき物語で彩られて居る。其等の物語を悉く解剖し、論じだてするは此書の目的でない。我等は姑く傳へらるゝまゝを記すに止めて置かればならぬ。ガリラヤの小村ナザレに住みゐしマリアと呼ぶ敬虔な一處女にある夜天使現れて、聖靈によつて彼女の胎に救主の宿る可きを告げた。未だ人に嫁がざる處女マリアはおぢ怖れたが、神の聖言と聞き聖言(みことば)の如く我にあれかしと從順に受け入れた。此の時より將來世界の精神界を支配すべき基督はユダヤの一處女マリアの胎に宿つたのである。或者はマリアの受胎を以て彼女の不義の結果と考へて居るが、我々は尠くとも彼女及びヨセフの性格から推して、マリアは決し

てさる行のあるべき婦人でないと言へる樣に思ふ、マリアは此の時其の親戚なる祭司ザカリヤの家を訪れて、篤信なる老夫婦と共に胎中の嬰兒を思ひつゝ、三ケ月の靜かなる信仰的生活を送つた。

耶蘇降生の季節は何時頃か定かに其れと知りがたい。其時ヨセフの一家は戸籍調査に就かん爲に居村ナザレを離れて祖先の地なるユダヤのベテレヘムに來た。斯くて其處に暫く留るうち世界の史潮を動かしたる嬰兒は、星明かに夜氣水の如く澄みて一星爛として東に輝く夕べ、巡禮者、旅人の假りの宿なる石室の馬槽のうちに呱々の聲を擧げたのである。其の夜近郊の野邊に羊群を守りゐし牧夫等、俄かに異象を認め、天樂靜かに響くを聞き、救主生れたるを知り、相携へて嬰兒を求めて石室に至り、敬虔の心を捧げて之を拜したと傳へられる。

猶太人の例にならひて嬰兒は八日目に割禮を受け、其名も曩きに天使の告げし所に隨ひてイエスと名付けられた。また其他猶太人の守るべき樣々の習慣、殿詣

での儀式など滯りなく濟ましヨセフはマリアと嬰兒を携へてガリラヤのナザレ村に歸つた。

ナザレは、今も旅人の去るを忘るゝ風光明媚な山村として世に著れてゐる。耶蘇は此の花靜かに草柔かき山里に育ちて、「智慧も齡もいや增さり、神と人とに愛せられた。」彼は當時の猶太學校に入りて經典を學んだとは思はれぬ。彼の敎育は多く家庭に於てなされた。ヨセフは「義しき人」なりと聖書に記されてゐる、敬虔なる祭司ザカリヤの一家を親戚に有つたマリアは、貧しき心を抱いて靜かに神の惠を待ちし典型的婦人であつたであらう。而して史家ヨセフアスの記す所によれば、猶太人の最大義務は神の律法を子弟に敎うる事である。耶蘇はかゝる家庭に育ちて木匠の業を學びつゝ、篤實なるヨセフの口から猶太獨特の森嚴なる神觀律法を語られたであらう。預言の書、詩篇の卷々は夜な〳〵慈愛深き母マリアの潤へる如き聲調と敬虔の心根を通して讀み聞かされた事であらう。親しき父母鄕

黙に伴はれて年毎にエルサレムに上る逾越節も幼き耶蘇の心に深き感銘を與へたものゝ一である。猶太人は此節近けば春の幾日を谷越え山越えて、古への物語に尊きさま〳〵の舊蹟を經つゝ京詣の歌うたひて旅するのである。耶蘇後年の親しき天父の感情や豊かなる詩想はかゝる間に養はれたものであらう。また猶太人の住む各地に散在する會堂はナザレの小邑にも存して、安息日毎に鄕人が其處に集うた。而して明敏にして濶達、獨創的な信仰を以て屢々村老を驚かした青年耶蘇は聖書朗讀者たる役目を受け持たされた事と思はれる（路四章十六節）。加ふるに周圍の美くしき自然は耶蘇にとつて最も有力なる師友であつた。彼は路傍の草花落日の光榮に神の力と美とを觀じたのである。ガリラヤの山容湖光は人をして神のイスラエルに約束し給ひし邦土なるを思はしむるに充分である。其の地方一帶は到る處歴史的回顧に充ちてゐる。ナザレの南に開けしエスドラロンの平野は其の左手に見えたるギルボア山と共に世に著はれし古戰場である。其かみ預言者エ

リヤがバアルの預言者と論爭せしカルメル山は右手に聳えて山勢遠く海に臨むである。シケムの聖處、音に名高きヤコブの靈井、神現はれしと云ふベテルの靈場等はエルサレムへの道すがら常に耶蘇の胸に過去を語りし名所である。耶蘇は是等神寂びし舊跡に親しみ古への歴史を思ひつゝ、風光明媚の故園に天禀の才德を養ひて早くも三十年を過したのである。

二

我等は第一章に於て、當時の民心皆な救主を思ひ神國の到來を翹望してゐたことを述べた。此時に當つて一預言者が現はれ、神國の到來既に目睫に迫れるを告げ、民心の渴望をして愈々興奮せしめたのも偶然でない。此の警告はユダヤの野より施洗者ヨハネの口を通して全土に響き傳へられた。——

神國に入らむとする者は先づ悔改めにかなふ果を結べよ、凡て善果を結ばざる

樹は伐られて火に投ぜられむ。審判主は近けり、審判主は近けり、彼は手に箕を持ちて來りて禾場を淨め、麥は集めて倉に收め糠は消えざる火にて燒かむ。二つの衣を持つ者よ、汝の衣服を持たぬ者に分け與へよ。稅吏よ、定めの稅銀の外に多く貪る勿れ。兵卒よ、人を强迫し誣訴することを止めよ、汝が得る所の給料を以て足れりとすべし……。

此の道德的革新の聲はパレステナの山々谷々に多大の反響を起した。『人懷望み居りし時なりければ』皆なヨハネに來つて其の罪過を告白し、葦高きヨルダンの清流に洗禮を受けたのである。洵に其の狀は嘗つて俘囚時代の一詩人が歌ひし預言の適中かとも思はれる。

『呼はる者の聲きこゆ、――野にエホバの道を備へ、
沙漠に我等の神の大路を直くせよ。
もろ〳〵の谷は高く、山と岡とは低くせよ、
曲りたるは直く、嶮しきは夷かにせよ。
かくてエホバの榮光あらはれん、
人皆な共に之を望まむ。』

神の榮光はまさに現はれねばならぬ。此時まで山色明媚のナザレに、神往靈感裡に自己の使命を默想してゐた耶蘇は蹴然として起ちてヨルダンの河邊に來た。此の時ヨハネは、「我は汝に劣る者なり」とて再三辭退したが、耶蘇は强ひて彼の手より受洗し、水より上る時天忽ち開け鳩の空より降る如く聖靈イエスの上に臨んだと傳へられる。また其時天に聲あつて雷の如く耶蘇の胸に響いた。――

『此は我が心にかなふ我が愛子なり。』

ヨルダン河畔に於ける受洗は實に耶蘇の公生涯に這入つた門出である。我等は此時よりして救主としての基督を仰ぎ、世界の歷史を新にした大活動を見るのである。さりながら耶蘇は活動に入るに先だちて野に退き、自己の取らむとする神

の事業に就いていま一たび默想した。――

人生とは何ぞ。究竟して人はたゞ肉體の生命を有つ爲めに本能的に此の生命を養ふ爲めに働くのみの者か、否な、否な人は自然的生活を捨てゝ精神的生活を營まなければならぬ。耶蘇卽ち舊約の聖語を引いて曰ふ、『人はパンのみにて生くる者にあらず、たゞ神の口より出づる言に由りて生くる也』と。彼は既に神の力の全身に充溢するを覺えた。人は自己天禀の才能を何の爲めに働かすべきか、我が使命の爲めにのみ注ぐべきか、または單なる衝動の爲めに其の餘力を揮ふも差支なきか。否な、天資の力を徒費するは古人が戒めたる所謂神を試むるものと言はねばならぬ。最後に耶蘇の最も深思せるは彼が事業の性質と其の手段とである。此世の力を用ゐて我れ此世の王とならむか、飽くまで同胞猶太人の期待に背いて靈界の救主とならむか。惡魔の形したる耶蘇の誘惑者は此時世界の諸國と其の榮華を彼の眼前に展開して言うた。

『汝若しひれ伏して我を拜せば之等のもの汝の屬とならん。』

耶蘇は一喝して此の誘惑者を退けた。

『サタンよ退け、主たる神を拜したゞ之にのみ事ふべき也。』

此の心内の試煉を終るや耶蘇は俄かに胸のうち晴るゝを覺えた。福音記者は之を形容して「終に惡魔彼をはなれ、天の使たち來り事ふ」と記してゐる。斯くて彼は己が使命に對する鐵の如き決心と、神と共に居る歡喜の心とを以て荒野を立ち出でたのである。

三

荒野四十日の試煉默想を經た耶蘇は、先づ新しき信念を抱いて再び施洗者ヨハネの許を訪れた。此の時ヨハネは其の弟子等に、眞の救主まさに世に出づべく、我は唯だ其の準備事業として道德的革新の洗禮を施こすに過ぎざる旨を語り聞か

せてゐたのであるが、いま恩寵と眞理に充ち」其顏に神子の光榮を漲らせて近づき來る耶蘇を認めるや、話頭一轉、

『世の罪を負ふ神の羔(こひつじ)を見よ』

と弟子等に警告した。更に、我に遲れ來らん者は我より優れる者也とかねゞ話し置きし人こそ此人なれと告げた。茲に於てアンデレ、ヨハネの二人の弟子は直ちに救の道を探るべく耶蘇に隨はんと決心した。此の折の耶蘇とヨハネの會見の模樣は讀者の想像に任すのみで福音記者も此に就て語つてをらぬ。兎に角耶蘇は翌日二人の新弟子を伴ひて故鄕ガリラヤに向ひ、道すがらアンデレの同鄕人なるピリポをも其の弟子に加へて、數日の旅行の後一と先づ故邑ナザレの家に歸り着いた。

我等は此時新なる使命を自覺して歸れる耶蘇の信念が其母マリアに如何なる感銘を與へたかを知らない。恰も隣村カナの親戚に婚姻が擧げられて、耶蘇の一家

および弟子も招かれて其席に臨んだ。席上酒盡きし時、イエス甕(かめ)に滿たせたる水を芳醇なる葡萄酒に變へて神の力と榮とを現はした時は、列(なみ)ゐる親族を驚かし弟子等をして愈々彼を信ぜしめたと、其時の弟子の一人なるヨハネは其の著書に記して居る。

數日ならずして耶蘇の一家はガリラヤ湖畔の小邑カペナウムに赴いた。ユダヤより彼に隨伴した三人の弟子は茲に分れて其の隣村なる彼等の故里ベテサイダへ一と先づ歸つた。そして彼等は耶蘇の事に就て鄕黨に遭ふ毎に振れてあるいた事と思ふ。アンデレは先づ其兄弟シモンに告げて曰ふ、

『我等メシヤ(救主)に會へり』

と。ピリポもまた隣人ナタナエルに逢うて言うた、

『我れ律法のうちにモーセの載せたる所、預言者たちの記しゝ所のものに遭へり』

た。此の噂を聞いた郷人は皆な耶蘇を慕ひてカペナウムに行つた事であらう。耶蘇は其の土地の會堂にて、安息日毎に神國の福音を宣べ改悛の道を説くや、聞く者皆な其の權威ある教に悉く歸服した。また會堂内に於て一人の鬼に憑かれたる人の病を退け、シモンの岳母の熱病を治した事は彼の名をして一層附近に高からしめた。

カペナウムに於ける最初の宣教は須臾にして耶蘇の聲名を響の如く四方の村々に傳へた。日々衆人踵を接して耶蘇の許に集り片時も其の傍を去らぬ。されど「我れまた他の諸村にも神の國の福音を宣傳せざるを得ず、蓋我れ之が爲めに遣はさるれば也」(路四章四十三)とは耶蘇の信念である。彼は茲に傳道旅行を思ひ立ち、先づ同伴者を得るためにガリラヤ湖畔に網うてるアンデレとシモン、ヤコブとヨハネの兩兄弟を招いた處、彼等はかれて耶蘇の教に歸依してゐた輩である故、卽座に舟と漁具とを捨てゝ人を漁る者となるべく耶蘇の後に隨つた。道すがら一

税所を過ぎたとき、其處に坐してゐた税吏マタイもまた一切を捨てゝ耶蘇に隨ひ新生涯を始めむと決心した。耶蘇は是等の弟子を伴うてガリラヤの諸會堂を巡回し、其の新法を宣傳したのである。

四

紀元廿七年の春が回つて逾越節が近づいた。耶蘇もまた祝節を守るためにエルサレムに上つたが、神殿の庭に、牛、羊、鳩を賣る者、兩替する者、舖をならべて走利求富に騷いで居るのを見ては、義憤一時に發して默視するに忍びない。我が家は祈禱の家と錄されたるに汝等は商ひの家とするか、此物を取りて疾く去れと叫びつゝ、叱咤鞭逐、商賈の群を一掃し崇嚴なるべき神殿の庭を清めた。中京に於ける耶蘇の此の行爲は實に彼が新法宣傳者としてイスラエル全土に臨むだ第一歩とも見るべきである。改革の道念烈日の如く激しく、峻嚴なる意力秋霜

にも譬へつべき耶蘇の風丰は此時人をしてさながら古への預言者を想起せしめた事であらう。耶蘇また偉大なる確信の聲を擧げて言うた。

『我れ此の神殿(舊猶太教)を毀ちて三日にして是れ(新教)を建てむ』と。

耶蘇は此の祝節の間暫時都に滯留してゐた。一夜ユダヤ人の宰(つかさ)ニコデモに新生の命の福音を說きしは此時である。其れより都を去り、弟子を伴うてヨルダン河畔に下り、彼處に留つて福音を宣べ傳へた。聲名を聞いて其處に集り來る者日々數ふべくもない、皆な己が罪を告白して新生の洗禮を受けたのである。此の時施洗者ヨハネもまた稍々上流なるアイノムの邊りで悔改の洗禮を施してゐたが、名聲漸く衰へて耶蘇に就く者の數が遙かに多い。或る者ヨハネに來つて言うた。

『見よ、汝と共にヨルダンの向ふにありて汝が證(あかし)せし者バプテズマ(洗禮)を施すに、皆かれに來る……。』

ヨハネは少しも動ぜずして靜かに答へた。

『人は凡て天より賜ふに非ざれば受くること能はず。我はキリストにあらず……。彼は必ず盛になり、我は必ず衰ふべし。』

何と云ふ謙遜な自からを知る者の答だらう。されど耶蘇もかゝる噂を世に聞こえさす事を好まぬ。ヨハネの猶ほ活動して居る間はユダヤを去らうと決心し、弟子を連れて再びガリラヤに歸つた。

此の途上ヤコブの泉井の傍にてサマリヤの女に道を說きし事も記憶すべき一の事件である。

五

我等は筆を轉じて、施洗者ヨハネの最後を述べて置かればならぬ。彼は猶太教が生み出した最後の偉人である。峻嚴にして狷介、僞善を憎むこと蝮蛇を見るが如く、傳教僅かに年餘、不義を責め。改悛を促がして、叱咤奬勵殆んど聽者の正

視を許さゞるものがあつた。恰かも此時ガリラヤの分封の君なるヘロデ・アンテパスは其兄弟ピリポの妻を奪うて自分の室とした。道念熠の如きヨハネ何條默視しやう、直ちにヘロデの面前に現れて手痛く之を責諫し、且つ其他諸々の罪惡を數へ擧げて完膚無からしめた。爲に彼は卽時捕へられて獄に下されたのである。爾後鐵窓裡に寂しき月日を眺めてゐたが、彼の一日も忘るゝ事の出來ぬ問題は神國の到來と審判に就てゞある。彼は究竟して猶太教の預言者に列せらる可き人物である。耶蘇の說く神の救濟と人の新生命は彼の未だ思及せざる所である。神の審判と人の悔改(註)此は彼が獅子吼する中心問題であつて、此上に正義の神國は建設せらるべしと預言してゐたのである。彼は既に靈感によつて耶蘇こそ「我より後に來りて我に勝る者なれ、我は之が證の爲めに遣はされたり」と確信してゐた。隨つて耶蘇によつて彼の預言が悉く成就せられ、彼の理想が實現せらるべしと期待してゐた。然るに罪人を救ひ、病ある者を醫す耶蘇の事業は彼にとりて啣か了

解しがたき點であつた。彼は二人の弟子を耶蘇に遣はして「來る可き者は汝なるか、また我等外に待つべき乎」と問はしめた。耶蘇の答は簡單である。

『夫れ瞽者は見、
跛者は歩み、
癩病者は潔まり、
聾者は聞き、
死にし者は復活され、
貧者は福音を聞かせらる。
凡そ我爲めに躓かざるものは幸なり。』

之を聞いたヨハネが猶も基督の新事業に躓いて、神國の本義を悟らなかつた乎、或はイザヤの預言(廿八〇十八、卅五〇五等)などを想起して救主の姿を蘇耶に見出すことが出來たかは局外より測知する事が出來ぬ。最後の悲劇は遂に到來した。

ヘロデ王其の誕生日の祝宴に於て、愛妾ヘロデヤの娘サロメの舞を見、輕卒にも何にまれ望むものを賞に取らせむと約束した。妖婦ヘロデヤは時こそ來つれと娘をすゝめて「バプテズマのヨハネが首を盆に載せて我に賜はれ」と乞はしめた。斯くして蓬髪長きヨハネの首は即時獄卒の刄に馘られ、妖しく笑へるヘロデヤの前に据ゑられたのである。

嗚呼かつてユダヤの野に咆哮して一世を聳動せしめたヨハネは遂に奸婦の謀叛に倒れたのである。耶蘇は彼を評して曰く、

『婦(をんな)の生みたる者のうち未だバプテズマのヨハネより大なる者起らざりき』と。

六

獄裡のヨハネに傳へられた耶蘇の答の如く、此の期に於けるガリラヤ傳道は最も目覺ましきものゝ一である。會堂に片手枯(な)へたる人を醫(いや)し、カペナウムに百人

の長(をさ)の病僕を醫し、ナインに寡婦の愛子を蘇生(よみがへ)らせ、西に赴き東に來り、綠布く山上に、波靜かな湖の岸に、至る所に神の國の福音を宣べて、『人の子』は眠るべき所さへなき程であつた。人々はまた遠く耶蘇の名を聞き、慕ひ來りて教を聽く者何千人なるを知らない。殆ど食する遑さへなく耶蘇に隨うて來る者さへあつた。

耶蘇の事業は此頃より漸く建設時代に這入る。彼は一には自分の事業を助け、一には我が亡き後其事を承繼すべき者を選んで特に訓練教導して置くべき必要を思うた。此の爲に多くの弟子の中から特に選まれたのが彼の十二使徒である。始めに召されたペテロ、ヤコブ、ヨハネ、アンデレ、ピリポ等は十二人の筆頭に擧げられた。稅吏マタイも此尊き列に加へられてゐる。バルトロマイ、トマス、アルパイの子なるヤコブ、レツパイ、カナンのシモン、イスカリオテのユダ等都べて十二人此選に預かつたわけである。耶蘇は之等のものを常に傍近く伴うて種々の教をなし神國の奥義を語つた。種々の理由からして、衆人には譬を以て神國の

福音を說けど、彼等使徒には直接神國の秘義を知らしめたのである。

此頃イエスは弟子と共に其故村ナザレを訪はれた。然るに村人は耶蘇の敎の權威と深味とに驚くばかりで、かゝる智慧と異常なる行爲は奈かにして木匠イエスより出づるやと疑うて彼に信服するに至らない。彼等は耶蘇の精神を悟る能はずして、自分等の仲間なるヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟なる耶蘇の外形に躓いたのである。茲に於て耶蘇は「預言者は其故郷に尊まれず」と云ふ警句を殘して、再び他村の傳道に發途した。嗚呼、耶蘇一日パリサイ人の家に入りし時、蠟石の盒(はこ)と香膏を持ち來り、耶蘇の足に塗りて涙もて其足に接吻した婦さへある。然ればこそポーロは言ふた、「我等今より後肉體によりて人を識るまじ」と。

基督の隨從者は愈々多くなつた。たゞに使徒、弟子達ばかりでなく、或は病を癒されたる爲め、或は敎に服したる爲め、多くの婦(をんな)たちさへも己等の全財産を擧げてイエスに供事した。七ツの惡鬼を追出されたるマグダラのマリア、ヘロデの

家令クーザの妻ヨハンナ、またゝザンナ等は其の中で今日に名前の傳はる婦達である。耶蘇は是等の弟子たちに或は種蒔の譬を以て、或はパンダネの譬を以て、或は芥種の譬を以て天國の奥義を敎へて倦む所を知らない。また彼等を遇するに神の道を聞きて之を行ふ者は是我が母我が兄弟なりてふ精神を以てしたのである。

此頃の傳道は主にガリラヤ湖周圍の村々に爲された。耶蘇は多く湖上舟行して南北に巡敎し、時に湖上風騷ぐとき舷頭に荒浪を鎭めて弟子達の信仰うすきを叱つた事もある、曉天水白き頃湖上を涉歩した事もある。斯くしてガダラに至れば塚穴に住む人の惡鬼を退け、ガリラヤに歸ればヤイロの娘を蘇生(よみがへら)すなど、彼の行く所常に宣敎と奇跡と伴はざるはない。

七

ひゝる間に耶蘇のガリラヤ傳道は既に一年を經過して春の逾越節は再び近づい

た。ガリラヤの諸邑(むら〳〵)を貫く道路は都に上る巡禮者の群を以て充ちて居る。彼等は彼等の有する聖書に約束された救主が近頃ガリラヤに現れて神國の到來を說いてゐると聞き、路を迂げて耶蘇の後を追うたに相違ない。彼等は耶蘇の權威ある敎と巧妙なる比喩談に魅せられて、己が旅路をも忘れて耶蘇の行く所に隨伴したであらう。一日耶蘇は彼等が既に食盡きたるを憐みてガリラヤ湖を見下す風色明媚の丘に導いて、春草美しき莚(むしろ)に、少量のパンと魚とを以て彼等を飽食せしめた。此の時餐莚に列りし者五千人と傳へられて居る。

イエスが爲した此の奇跡は多數のガリラヤ人に異常の印象を與へた事と思ふ。五千人の中には「イスラエルの救」を待てる信仰者、神の國を「力をもて」取らんとする『熱心黨』も多く居たに相違ない。彼等は耶蘇の新法と奇跡を目のあたり見聞して「此は誠に世に來る可き預言者なり」と叫んだ。殊に熱心黨の連中は時こそ來れと雀躍して、卽刻イエスを王に推戴し、宿年夢みた神國の旗風を飜さむと思う

た。併し耶蘇の志す所は此世の王國ではない、彼は是等の擧動を見るや、早速彼等の視線を避けて獨り山に隱れた。民衆は肝心の耶蘇を見失うたので、再び耶蘇の後を追ふて翌日カペナウムの邑(まち)に彼を探し當てた。

『ラビ何時茲に來り給ひし乎。』

彼等は先づ口を切る。耶蘇之に應じて卽座に大說敎を試みた。——

『嗚呼、汝等我を尋ぬるはパンを食したるが爲めか、汝等朽(くつ)る糧(かて)の爲めに働かずして永生に至る糧の爲めに働け。何の業(わざ)をなさば神の業になる可きかとや。言ふ迄もなし、神の遣しものを信ずるは卽ち其業なり。神は今や汝等に眞のパンを與へ給へり。我は卽ち天より降りし生命のパンなり。我に就(きた)るものは餓えず、我を信ずるものは渴かず。汝等此世の王國のために我を待つ勿れ。我は只我を遣しゝ神の意を行はんのみ。神の遣はしゝ子を信ずる者は幸なるかな。彼は末の日に蘇生らさるべし。是ぞ眞の生命を得たる事なる。是れやがて天父の御旨なり。此の

外に何の救あらんや……。』

猶太人の或る者は耶蘇の「我は天より降りし生命のパンなり」と云うた言葉を解し兼ねた。彼が父母は我等の知る所ならずや、彼はヨセフの子に非ずや、と譏った。

『我を信ずるものは永生を得べし。我は生命のパン也。人若し此パンを食はゞ限なく生く可し。我肉を食ひ我血を飲む者は我に居り、我も亦彼れに居る。生ける父我を遣す。父によりて我が生ける如く、我を食ふ者も我によりて生くべし。……』

キリストの救は全く精神的の事に屬してゐる。キリストの肉と血を食ひ、神秘的に彼のうちに生きて居るものゝみ彼と共に永遠の生命を享受する事が出來る。此の永生を得たる者は卽ち彼の信徒で、神の國は其等の信徒の間に建てられる。天父の此世を救ふ御旨は此の意味に外ならぬ。

斯かる精神的な耶蘇の教は勿論此の世の救を望むでゐた群衆に徹底する筈がない。羅馬の主權に對して獨立の軍を起す可き救主を望むでゐた熱心黨の輩(やから)は耶

蘇の言葉にいたく失望した。失望した彼等は耶蘇の許を去つた。昨日迄耶蘇の跡を追うて何千の人が隨いて來たが、此の説教以來耶蘇と共に行くものは頓かに減じて了つた。耶蘇は此樣を見て、群衆がついに眞の生命を見出す能はざるを憐むと共に、つら〳〵俗人輩が此世の救に捕はれて眞の神國に入る能はざるを嘆ぜざるわけに行かなかつた。耶蘇は傍に侍した十二の使徒に問はれた。

『汝等もまた去らんと思ふや。』

さすがに使徒たちは師の心を解してゐる。彼等は申し合せた樣に決して耶蘇の許を去るまじと誓つた。

『主よ我等は誰に往かんや。永生の言(ことば)を有てるものは汝なり。』

とは此の時使徒の一人なるペテロが全體の心持を代表して言うた言葉である。此言葉を聞いた耶蘇の喜は察するに餘りある。嗚呼眞理は自ら宇宙の大を測らんとする學徒の心や、此世に捕はれた熱心黨の胸に徹底せられずして、赤子の如き態

度を以て耶蘇の教に信服せる是等漁夫税吏の心に通じたのである。耶蘇は覺えず天に向つて謝せざるを得なかつた。

天地の主なる父よ、此事を智者達者に隱して赤子に顯し給ふを謝す。父よ然りそれ是の如きは聖旨に適へるなり。」

彼はまた使徒を顧みて喜の情を叙べた。

「汝等が見る所の事を見る其の眼は幸なり。我れ汝等に告げん、多くの預言者および王も汝等が見る所の事を見んとせしかども見ず、汝等が聞く所の事を聞かんとせしかども聞かざりき。」

此の事件は實に耶蘇の傳道生涯の一大轉機である。彼の旗色は是より鮮明になつて行き、彼に敵するものと、彼に就くものと判然分れる樣になつた。

八

此機會に於てイエスの反對者に就て少しく述べて置かねばならぬ。耶蘇に對する第一の反對は熱心なる猶太教徒の間に起つた。之が第一聲は既にガリラヤ傳道の初期に於て擧げられて居る。耶蘇カペナウムの某家に神教を垂示しつゝありし時、パリサイの人、教法師も座にあつた。此時癱瘋を病むもの、四人の者に舁かれて病を癒さるべく、家根より縋り下されて耶蘇の前に据ゑられた。耶蘇つら〳〵病者を眺めて其やつれたる顏容に信仰の色の輝くを認むるや、

『人よ汝の罪赦さる。』

と謂うた。猶太教に於ては神を畏敬するの餘り、殆んど人事に關係しない高い所まで祭り上げた事は最初に說いた如くである。彼等は神の名のエホバと云ふ語を口にするだに冒瀆の罪と考へた。況んや自ら僭して神の子と稱するが如きは到底許し難き罪惡である。今耶蘇が神の如き權威を以て、「子よ汝の罪赦さる」と言うた事を聞いて、座に居合はしたパリサイ人教法師等は、此れ甚しき語なり、此の

瀆す事を云ふ者は誰ぞ、神より外に誰か罪を赦す事を得むと、己等の信仰を傷けられたる如くに感じて大に怒つたのである。

次にパリサイ人が耶蘇に對する反抗の火焔は安息日の行動に就いて再燃した。猶太教の信仰によると、安息日は神の日として絶對に休息す可き日であつて、路程廿町以上を歩行する事さへ此禁を犯すものと考へられてゐたのである。されば耶蘇が安息日に麥畠を歩みつゝある時、弟子等が麥の穗を摘み始めたのを見たパリサイ人は、直に「彼等は安息日にすまじき事をなせり」と叫んだ。數日の後耶蘇は再び、安息日に會堂に集合した時、片手枯へたる人を憐に思うて癒した事がある。之を見たパリサイ人は、又してもナザレの耶蘇は安息日に業をなせりと非難した。耶蘇の信念は明白である。

『安息日に善行をなすと惡行をなすと、生くるを助くると殺すと孰れぞ……。人の子は安息日にも主たるなり。』

併しパリサイ人の傳說的信仰は決して之を許さない。神に重大なる罪を構へたるものは石にて打殺す可し、と云ふが舊約の律法である。此時より彼等は如何にしてか冒瀆者イエスを殺さむとヘロデの黨に謀つたのである。

さらばパリサイ人が謀つたと云ふヘロデ黨は何故耶蘇に反對したか。彼等はヘロデ王家に忠勤を抽んで、此王家を護り立てゝパレステナ一圓の地を治めしめ、あはよくば羅馬より派遣されたる代官を逐ひ拂うて、猶太教年來の宿望たる獨立神國をヘロデ王家の手に由つて實現せしめんと志す輩である。隨つて自から猶太人の王なりと稱する耶蘇はまさに彼等の敵である。加ふるに耶蘇の奇跡的行爲と權威ある教さがガリラヤ全土の民心を彼に歸響さした事は、彼等ヘロデ黨の嫉妬猜かざる所である。或は兼て約束せられたる猶太人の王は耶蘇によつて成就せらるゝかも知れぬ。是れ彼等が耶蘇を殺さゞるうちは枕を高うして眠る事が出來ぬとした所以である。

最後にヘロデに就て一言せねばならぬ。彼は迷信に強き優柔不斷の漢である。麗きに愛妾ヘロデヤの妖言に惑はされてヨハネの首を刎ねた以來、良心の苛責を感じ、秘かに疑心暗鬼を生じてゐた彼は、恰かも其時ガリラヤの隈々にまで響き渡るイエスの名聲を聞いて、必定ヨハネの再來なるべしと思うた。

遙かに此事を聞いた耶蘇は早くもヘロデがヨハネになしたと同樣の壓迫が影の如く自己の身邊にも下りてくる事を感受した。於茲、彼はガリラヤ傳道を姑く十二使徒の手に委ねて、自からは他の地方に宣教す可く決心した。傳によると、此の時耶蘇は十二使徒を召き、之に凡ての惡鬼を追出し、病を癒す權威と能力とを授け、且諸々の傳道上の注意と教訓を與へでガリラヤの村々に差遣はしたのである。使徒等は二人一組となつて、一領の旅衣、一本の杖の外、行囊を持たず、金錢を用意せず、粗履を穿つて各々志す方に赴いた。

『我れ汝等を遣すは羊を狼の中に入るゝが如し。』

とは洵に此時の耶蘇の心情である。

此の時十二使徒のうち二三人の者は猶殘つて師の行く先に隨伴し、師と共に苦勞を頒たむと心がけた。ガリラヤの漁夫なりし熱血漢ペテロ、雷の子と稱ばれたるゼベダイの子ヨハネとヤコブは卽ち此の任務に當つたのである。

耶蘇は是等數人の者を伴れてガリラヤを去り。北の方海に沿ひたるツロとシドンに赴き、一度たびガリラヤ湖に歸つて啞者を癒し、姑く湖畔に赤教を試みたが人は徒に休徵を求めて其教說に聽く事をなさない。加ふるに彼の身には何時危險の襲來するやも計られぬ。「パリサイ人の麪酵とヘロデの麪酵を愼めよ」とは此時の狀況を語るものである。彼は再び去つて北方を指した。

九

北の方雪を戴くヘルモン山の根がカシヤペーの谷に限られて綠の裾野となる所

にカイザリヤ・ピリピと云ふ都市がある。南にザアレの谷川を控へた此邊り一帶は清泉溢れ、流水盡きず、野菜と果實たわゝに生じ、豐饒なる田野は遙に西に延びて居る。氣候飽く迄溫和にして亭々たる白楊樹、槲樹夏日の凉蔭を造り、低く咲き亂れたる草花四季の眺めを絶やさぬ。此の美しき都は昔より異敎崇拜の中心地として知られて居る。其の昔精靈敎の盛なりし頃、セム民族のバアルガド（幸福の神）は此處に祀られた。希臘文化の侵入と共に、牧人の神パンは此所に拜まれた。羅馬政府へロデ大王に此地方を與ふるや、彼は宏壯なる殿堂を羅馬帝王敎の爲めに茲に築いたのである。そして彼の子ピリピに由りて、街路の美と輪奐の壯とは一層其光を增したのである。此世の榮華と權威を語るは此處である。空虛なれど華かなる異敎多神の美を現はしたるは此町である。

今耶蘇の一行は此町に這入つた。其の衣は破れたれど磐石の如き耶蘇の信念を包むでをる。其の髪は亂れたれど神を見る其の眼光（まなざし）は輝いてをる。見よ、此の宏

壯なる都市の美、其は曾て荒野の試練に於て一蹴し去つたものである。人の建てたる美は往々神の與へ給ふ知見の光を奪ふ事がある。耶蘇は弟子を顧みて問ふた。

『人々は我を云ひて誰とするか。』

弟子は答へた。

『或人はバプテズマのヨハネ、或人はエリヤ、或は古への預言者の一人の蘇生せるなりと云ふ。』

耶蘇は更に追求した。

『汝等は我を言ひて誰とするぞ。』

三人のうちペテロは最も奔放の情强く、隨つて其師に對する信服の情も人一倍に燃えて居る。彼は言下に答へた。

『汝は活ける神の子キリスト也。』

此の答を聞いた耶蘇の歡喜は喩ふるに物がない。彼が使命の自覺は此の信仰を中

心としてゐる。彼が三年の傳教は人々より此の告白の聲を聞かむが爲めである。
洵に耶蘇を此世の救主ならぬ靈的の王(キリスト)と認むる事は猶太的自負心に抱
着して居るものや、熱心黨の思ひ及ばぬ所である。血肉につける野心や名望を去
つて靈界に新生した者でなければよくする所でない。耶蘇は讃嘆した。

『ヨナの子シモン(ペテロの前名)よ、汝は幸なる哉。そは血肉汝に示せるに非
ず、天に在す我が父なり。』

併し耶蘇は未だ全く安んずるわけに行かぬ。假しや彼に近き使徒等が自分の中
に靈的救世主の姿を認めたりとて、彼等は猶ほ從來の猶太的色彩を以て、此救主
を榮光に充ちた勝利の君の如くに描いて居るかも知れぬ。何ぞ知らん、世界の歴
史に新らしき紀元を起す可き救主は此世に於てはあらゆる苦痛と舊法との戰鬪を
經なければならぬのである。「此時よりイエス、其弟子に己のエルサレムに往きて
長老、祭司の長、學者たちより多くの苦を受け、且殺され、三日目に甦ることな

どを示し始む」と福音記者は語つてゐる。

果して耶蘇の豫測は誤らなかつた。彼の説く救主の將來はあまりに絶望的であ
る。彼等の期待する救主は榮光の君で、聖國の來らん時、彼等は其左右に侍する
ものと考へてゐたのである。されば耶蘇の將來に對する暗き預言は弟子達の心よ
り光明を奪ひ去つた。ペテロは驚愕してイエスを引き止めた。

『主よ宜からず此事必ず汝に來る勿れ。……』

現世の成功は耶蘇の既に荒野四十日の試練に於て捨て去つた所である。然るに
それと同樣の誘惑は今最愛の一人の弟子の口より發したのである。耶蘇は一喝し
た。

『サタンよ、我後に退け、汝は我に躓く者かな。汝神の情を思はず却て人の世
の情を思ふ。』

此時耶蘇は、眞理の爲めに此世と戰ひて遂に殉す可き覺悟と決心とを懇々弟子

達に說きさとした。「我に隨はんと思ふ者は己を捨てゝ日々犧牲の十字架を負はざる可からず。聽け、汝等の希ふ榮華はよし全世界のものを得るとも其の生命を失はば何の益あらんや。生命を完うせんと欲する者は之を失ひ、我が爲めに福音の爲めに生命を失ふ者は却て之を得る所以なり。されど汝等慰めよ、我と、我道の爲めに苦しみたる者は人の子父の榮光を以て其の聖使と共に來らむ時必らず報いらるべし」と。

此教を聞いた三人は始めて靈界の君の姿を朧氣ながら悟る事が出來た。そして師に隨ふ自身達もまた道に殉すべき覺悟をきめた事と思ふ。彼等は現世の成功に死して靈界の光榮に生く可き者共である。此點に開眼せられたる彼等は一週間ならずして眞の光明界を眼のあたり實見する事が出來た。

「六日の後耶蘇ペテロ、ヤコブ其兄弟ヨハネを伴ひ、人を避けて高き山に登り給ひしが、彼等の前にて其容貌(すがた)かはり、其面目(かほ)の如く輝き、其衣は白く光れり」とは福音記者マタイの語る所である。我等は今日よりして此の高山を何所とも定めがたいが、從來傳說されたる南の方タボル山とするよりも、矢張りパレステナの北境を守るヘルモン山とした方が理窟に合ふ樣に思ふ。カイザリヤ・ピリピに三人の使徒に重要なる敎をなした耶蘇は、古への詩歌に數多謳はれたヘルモンの高峰、風や起さむ、泉湧かせむ、夏日の空に靑き姿して北に聳えたるを見ては、そぞろに山靈の招きを感じたであらう。福音記者ルカは「イエス三人を伴ひ祈禱せむとて山に登れり」と記してゐる。かくて行く〳〵水迸ばしる岩角のほとりに、靑葉深き森の中に、祈りし祈禱は天にや通ぜむ、山や應へむ、塵環を去ること遙かに、六日あまりにして頂を極めた。

此時耶蘇は跪いて祈つた。——飼ふ者なき羊にさも似たるイスラエルの民を見

よ。人の世の王を求めて靈界の救を知らざる多くの人を思へ。親しき使徒等幾何か天父の聖旨を悟りたる。遮莫、使命の自覺、我が衷に明らかにして、强き事鐵火の如し。カルヴリの丘は十字架の影を投げて我を待てり。噫、神の道に殉したるもの丶光榮は靈界に於ていかに白きかな。——

三人の使徒は既に一週以來の教と祈のうちに師の精神を學んだ。彼等も師の傍に跪いて天地に俯仰し、至誠を以て祈つた。——我等をして神の用ならば、福音の爲めに生命を失ひて眞の生命を得しめ給へ。主と主の道を恥ぢず、人の子榮光をもて來る時我等を救ひ給へと。

此の時、見よ、耶蘇の顏容日の如く輝きて其衣は雪の如くに白くなつた。榮光の御座を分ちて、古の聖者、モーセとエリヤ其左右に侍す。何たる榮光ぞ、神の國に住はん者は幸なるかな。三人の中なるペテロは進み出で丶言うた。

『主よ、此處に居るはよし、我等に三つの廬を造らせ給へ。一は主の爲め、一

はエリヤの爲め、一はモーセの爲めにせむ。……』

此の時法音雷の如く輝雲を通して彼等の耳朶に轟いた。

『此は我心に叶ふ我が愛子なり、汝等之に聞く可し。』

三人の弟子は懼れ伏して地上に蹲つて了つたが、やがて頭を擧げた時は彼等を勞はる例もながらの愛師耶蘇の高姿を仰ぐのみであつた。耶蘇の神子の自覺は天上の榮光に留まる事を許さない。彼の使命は人の世に福音を傳へて道に殉するにある。彼は三人を伴ひ山を下つて再び紅塵の巷に出でた。

此時山麓では惡鬼につかれたる少年の爲めに狂氣の如き親と、之を癒す能はずして周章せる數人の弟子と、群がる人とで喧騷を極めてゐた最中である。其の子の親、イエスの姿を認むるや直に叫んで曰うた。

『主よ、惡鬼につかれたる我が獨子を憐み給へ。』

基督降生の目的は神の道を傳へるにある。奇跡は其餘業である。ニネベの町に

説教を試みて悔改めさせし預言者ヨナの依徴の外に依徴は與へられぬ。耶蘇は長大息した。

『嘻、信なき世なる哉。何時迄我れ汝等と共に在らんや、何時迄我れ汝等を忍ばんや。』

惡鬼に惱まされた子は耶蘇によりて幸に癒さるゝことを得た。其親の涙の祈が天に聞かれたからである。此の時曩さに惡鬼を追出す事が出來なかつた弟子は耶蘇に問うた。

『我等之を追出す能はざるは何故ぞ。』

彼は答へた。

『此のたぐひは祈禱と斷食に非れば逐ひ出すこと能はざる也。』

と。此の天上に於ける耶蘇の榮光の貌(すがた)と、下界に於ける人の世の喧騒とは畫聖チヽアンの曩筆によりて一幅の畫面に描き出された以來、不朽の趣を添へてきた

物語である。

十一

秋の節蕪は近づいた。ガリラヤ及び北部地方に於けるイエスの事業は餘に大半終つた。イエスの兄弟は彼にすゝむるに彼の宣教と奇跡を中京に於て試みむ事を以てした。併し此の時耶蘇は猶ガリラヤの分封の君ヘロデの前を避けて居る日陰の身分である。依つて彼等と公然エルサレムに上るを避け、迂路サマリヤを經て、私かにヤコブ、ヨハネを伴うて上京する事にした。途を行く時或る人耶蘇に來りて、主よ何處に行き給ふとも我れ隨はんと扈從を誓つた。既に耶蘇はヘロデの前を避けて私かにガリラヤを立ち退く途中である。之に答へて曰く、

『狐は穴あり、空の鳥は巣あり。されど人の子は枕する所なし。』

と。エルサレムに於ける祝節の半ば頃である。何時の間にか到著してゐた耶蘇

は突然神殿に現れて侃々の聲を振つて其の新法を宣傳した。節莚に集まつた人々は之を聞いて或者は其知識と權威ある教に感じ、或者は豈ガリラヤより預言者起らんやと叫んで各自家に歸つて了つた。

此の節莚の間一日耶蘇はエルサレム近郊の小村ベタニヤを訪はれた事がある。すると豫て耶蘇の噂を聞いたマルタと云ふ婦が彼を迎へて己の家に招いた。耶蘇は此家に於て其姉妹マリアの道に熱心なるを見、靜かに足下に坐す彼女に神國の福音を説いた。耶蘇がマルタに向ひて、「汝多くの事に就て心づかひせり、されど無くて叶はぬものは一なり。マリアは既に善き方を選びたり。」と告げ、山海の珍味を馳走するよりも、神の道に傾聽するものは遙かに我を喜ばすものであると教へられたのは此の際である。

耶蘇の最後は既に一年を餘さぬ。されどイスラエルの家の悉くに福音傳はらざる先きに最後は來らない。ヨルダン河東ペレアの地は未だ耶蘇の足跡至らぬ所で

ある。於茲彼は自ら到らんとするに先だち、七十人の弟子を選んでペレアの諸邑へ派遣した。七十人は二人づゝ一組となつて各地に宣教し、家より家へ「神の國は近けり」と警告した。また道途に遇ふに隨つて病者を癒したるに、悉く彼等の力現はれざるはなかつた。

耶蘇もやがて彼等の足跡を辿るべく自身ペレアの傳道を思ひ立つた。我等は斷片的なる福音書の記事によりて其道筋を明かに辿る事は出來ぬ。さりながら路加傳十一章——十三章の記事は此の傳道に於ける事件と教訓とであると考へて大差ない。兎に角此行はイエス三年の宣教に於ける掉尾の大傳道であつた。或所に於ては「數萬の人々相踐み合ふ程に集れり」と記してある程、盛であつたのである。此際に於ける耶蘇の滿足は下の挿話のうちによく現はれてゐる。曩に派遣せられたる七十人の者、其任務を終へゝ喜び歸りて、「主よ惡鬼さへも汝の名によりて我等に服せり」と耶蘇に報告した。耶蘇も亦神の道のかくも有効に傳はりたるを聞

き、此世の力衰へて神國の建設來るべきを思ひ、喜びの聲を擧げて言うた。

『我れ電の如くサタンの天より隕つるを見し。』

されど弟子達には、

『然れど惡鬼の汝等に服しゝを喜びとする勿れ。汝等が名の天に錄されしを喜びとす可し。』

と戒めた。

同年十二月修殿節の時、耶蘇は一度びペレアを去つて上京した。其時神殿中のソロモンの廊に於て端なくも猶太人と大議論を戰はした。耶蘇が「我と父とは一なり」との言を吐いた爲めに猶太人は甚しき冒瀆なりとて石を以て彼を擊たんとしたのである。神の道を中京エルサレムに傳ふるには到底最後の血を以てせねば駄目である。耶蘇は再び都を去つてペレアに赴いた。

十二

第二期ペレア傳道の事蹟は路加傳十三章の中頃より十七章、其他馬太傳馬可傳等に散見せられる。耶蘇は既に最後の悲劇を覺悟してゐる。此時代の耶蘇の談話を讀むものは宜しく彼の心を以て讀まればならぬ。「窄き門より入れよ。救はるゝものは如何に少きかな。」(路十三〇)、「神の國の節莚に於て一人だに其の餐を味ふものなし。」(路十四〇)等の談話は當時常に危險の下にありたる耶蘇の心事を現はすものである一日パリサイ人より「ヘロデ汝を殺さんとす」と告げられた時、耶蘇の答の如何に劇烈であつたかは最もよく此の消息を語つてゐる。曰く、

『汝等行きて其狐に告げよ、我れ今日明日惡鬼を逐出し、病を癒し三日目に此事をはらん。されども今日、明日また次日は我れ傳敎せざるべからず。思へ預言者はエルサレムの外に殺さるゝことあらず……。』

而して一轉してエルサレムの爲めに長歎して曰く、

『噫、エルサレムよ、エルサレムよ。預言者を殺し、汝に遣はされし者を石にて擊てる者よ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く我なんぢの子供を集めんと爲せしこと幾度ぞや、されど汝等は好まず。視よ汝等の家は墟となりて遺さる可し。』

然れども耶蘇の心中の他の半面は神の愛の暖かき思想に充ちてゐる。九十九の羊、放蕩息子等の譬話は此の頃に、やがて世を去るべき事を思ひつゝ弟子達になした慰めの教である。かの主禱(路加傳十一章二以下)を教へたのも此際である。恐らく曩きにヨハネの洗禮を施しゝ所に赴いてゐた頃(約十章四十節)、弟子の或者が嘗つてヨハネが其弟子に祈禱を教へた事を憶ひ出して耶蘇に乞うたのであらう。耶蘇は直ちに一定の祈禱文を教へ、更に、

『誰れか其子のパンを求めんに石を與へんや、魚を求めんに蛇を與へんや、況して天に在す父は求むる者に聖靈を與へざらんや。……求めよさらば與へられ、

尋ねよさらば會ひ、叩けよさらば開かるゝ事を得ん。』

と弟子達を勵ましたのである。

曩きにガリラヤ傳道を耶蘇に委託された使徒等は此頃既に任務を了へて續々彼地を引き上げてペレアなる耶蘇の許に歸つて來たと思はれる。茲に耶蘇の美くしき心情を物語る一挿話がある。曩きに耶蘇がエルサレムにある頃、其近郊ベタニヤの小村にマリア、マルタの姉妹を訪はれた事がある。二人の姉妹及び其弟ラザロの麗はしき性格は其後耶蘇をして此平和なる一家を限りなく愛せしめたのである。然るに恰も此時ラザロが重き病に犯された爲め二人の姉妹は耶蘇の許に、『主の愛する者病めり』と言ひ遣はした。此を聞いた耶蘇は驚いて早速『我等またユダヤに往かむ』と弟子等を誘ふ。弟子及び使徒等は師を思ふのあまり切に諫止して言うた。

『師よ、ユダヤ人は先き頃も汝を石にて擊たんとせしに非ずや、然るにまた彼

處に往き給ふか。』

されど耶蘇はなか〳〵に思ひ止るべくもない、強ひて旅立たむとするを見て、トマスは決然として曰ふ、

『我等も亦往きて彼と共に死ぬ可し。』

使徒等は決死の覺悟を以て愛師に隨つてユダヤに向つた。されどラザロは耶蘇一行の到着せざる四日前既に死してゐたのである。一行がベタニヤの村近くに着くと、其處に涙ながらのマルタは早くも迎へに來た。

『主もし茲に居ませしならば我が兄弟は死なざりしならん。されど今にても汝が神に求むる所は神汝に與へ給ふべし。汝は世に來るべきキリスト神の子なりと信ず。』

時を移さずマリアもまた來つて耶蘇の姿を見るや、悲歎一時に發し、足下に伏して歎いた。

『主もし茲に在せしならば我が兄弟は死なざりしものを。』

とは僅かにせきくる涙を抑へて其の口より洩れた言葉である。ついに泣かぬ丈夫の耶蘇も此時ばかりは同情の念油然胸に湧起したと見え「イエス涕を流し給へり」と福音記者は記してゐる。耶蘇は姉妹に導かれて直ちに墓場に赴き、既に臭氣強いラザロの前に立ち、天を仰ぎて祈り且つ謝して屍體に喝を加へた。

『ラザロ出でよ。』

神の力と榮は直ちに現れ、ラザロは布にて手足を纏かれ、面は手拭にて包まれたるまゝ墓を出たと其時の實見者たるヨハネが記してゐる。マリア、マルタ姉妹の喜び、耶蘇の滿足は記す迄もない。斯くて此一家はます〳〵耶蘇を信賴し、耶蘇はまた此一家を愈々愛したのである。

十三

ラザロを蘇生らした事は果して使徒等の憂へた如き結果をもたらした。其場に居合せた猶太人の或る者は直ちに走せてパリサイ人に耶蘇の奇蹟を語つた。常から耶蘇の言行を甚しき不敬事として憎むでゐたパリサイ人は奇貨措くべしとなして、直ちに祭司の長に乞うてサンヒドリンの議員を召集して耶蘇の事をはかつた。サンヒドリンの議員は現世主義のサドカイ人等である。斯かる者を捨て置くときは民皆な奇蹟を見て彼を信ずるに至り、羅馬兵はまた之を一揆の類と見做して是が鎮靜を口實に終には我等の國をも民をも奪ふに至るべしと言ふ考から、一も二もなくパリサイ人と共に耶蘇を殺す事に贊成した。此年の祭司長であつたカヤパも此の決議に贊成したが、さすがに事理を辨へて居る。彼は議員達に告げて言うた。

『汝等は何事も了解してゐない、たゞ自分の都合や嫉妬心から之に贊成したまでゞある。併し其實此人の死するは民の爲めに一人死して擧國亡びざうんためである。』

福音記者ヨハネは此のカヤパの言を大に稱揚して、耶蘇の死は萬民に眞生命を與へる所以なりてふ精神的の意味を不識の間に預言したものとも解せられると言うてゐる。兎に角此日よりして、パリサイ、サドカイの徒は耶蘇を捕へむとしたので彼は再びユダヤを去つて、野に近きエフライムの方に退隱した。

耶蘇の三年の宣教は此期を以て最後とする。神の國に就ての談話（路十七章廿以下）、高慢なるパリサイ人と謙遜なる稅吏との話（路十八章九以下）、離婚に關する教訓（太十九章三以下）等は此頃に語られたものである。十人の癩病人、嬰兒を祝せしこと、富める青年に對する警告等は此際の行である。斯くて告別的傳教を試み居る間に、壓迫の黑き影は愈々濃く耶蘇の身邊を掩うて來た。ガリラヤに行けばヘロデの手を免るゝ事が出來ぬ。ユダヤにてはパリサイ、サドカイの徒が捕繩を用意して耶蘇の到るを待つてゐる。耶蘇は決心した。彼は固よりすべての預

言者は世に容れられず、慘ましき迫害を受けて終に犧牲の死に終るべき事を考へてゐる（太廿三章卅以下）、我が十字架に死すは天父の聖意なりと確信して居る、而して今こそ其時なれと覺悟した。彼は人なき所に十二使徒を呼んで嚴然として告げた。

『我等エルサレムに上り、人の子は祭司長と學者等に賣（わた）されん。彼等之を死罪に定め、また凌辱し鞭ちて十字架に釘（つけ）んために異邦人に渡すべし。されどまた三日目に甦（よみがへ）ることを得む』と。

使徒等は今に耶蘇を信じて、彼は他日異常な能力を發揮して乾坤一擲的の快事を敢行する事と心得てゐた。最近屢々耶蘇によつて其の誤想をたゞされたとは言へ、猶ほ彼の奇跡的能力を見る毎に、以前の猶太的思想が頭を擡げんとしてゐる。其處へいま右の様な言葉を聞いたので、彼等は一もニもなく最後の「三日目に甦る」と云ふ點にのみ重きを置いて了つた。そして耶蘇よみがへりたる後の神國の

狀態を様々に描いて、自分等の位置をさへ夢みた。ヤコブとヨハネの兄弟は殊に耶蘇の愛した使徒である。彼等の母は二子の口より耶蘇の言を聞き、女らしい親心から二人を伴うて耶蘇の前に出でゝ願うて見た。

『主よ、汝御榮（みさかえ）を得給はんとき、我子の一人を汝の右に、一人を左に坐（すは）らしめ給へ。』

耶蘇の榮は十字架の死を經て受くる精神的の光榮である。此世に於ては飽くまで失敗者であらねばならぬ。彼は喟然として答へた。

『汝等は願ふ所を知らず、汝等わが飲む所の杯（苦痛）を飲み、我が受くる所のバプテズマ（死）を受け得るや……。』

耶蘇は更に語をついで、彼等兩人および兩人の言動に憤れる他の十人の使徒に對して諄々と說いた。——

此世の君は人の上に立ちて民を治め、また力優れたる者權力を握るは汝等の知

ろ通りである。されど汝等に於ては然してはならぬ、凡そ大ならむと思ふ者は却て人に使役るゝ者となり、頭たらむと思ふ者は却て人の僕となる。我の世に來るも人を使役はん爲めに非ずして、却て人に使役はれ、また多くの人に代りて命を捨てゝ萬民の贖とならん爲めである……。

此教をなして耶蘇は十二使徒を隨へてエルサレムに向つた。途にエリコの古城を過ぐる時、城門の外に坐してゐた盲乞食の熱心を見て其眼を開いてやり、町の中にて稅吏長ザアカイの求道の志あつきを聞いて其家に宿り、教をたれて一家を救の道に導き、斯くて道を早めてエルサレム城外廿七町なるベタニヤのマルタが家に一と先づ足を留めた。其處には曩きに死にて甦らされしラザロも今は壯健で働いてゐる。マルタ、マリアは愛師の再訪を受けて祝莚をまうけて喜んだ。併し此喜びも束の間、彼等は耶蘇こたびの來訪は最後の來訪で、エルサレム指して死にゝ行く憂ひの旅路、明日はつとめて告別せねばならぬと聞いた時の此夜の悲は

いかに深かつたであらう。殊に始めて教を聞きし此かた、信仰の道一すぢに清き心をもて耶蘇に事へたマリアは、かれて蓄へ置きたる價尊きナルトの香油を耶蘇の頭に注ぎ、また足に塗りて己が頭髮もて拭ひ、哀別の誠を現はした。されば耶蘇もまた利慾の外何事をも知らぬユダの言を斥けて、

『此女は我が葬の日のために之を爲せり。嗟乎、天の下何處にても我が福音の宣傳へらるゝ所には、此の女の爲しゝ事もその紀念に言ひ傳へらるべし。』

と之を嘉賞したのである。

悲しき一夜は過ぎた。ユダヤ人は早くも耶蘇が茲に居るを知りて多くの者次第に集つて來た。祭司の長等は此の爲めに益々いらちてラザロをも殺さむと謀るに至つた。耶蘇は長く此處に留るべきでないと悟り、二人の使徒を先きに遣はして一疋の若き驢馬を求めさせ、自から之に打ち乘つて昔預言者が謳ひしと言ふ平和の君の姿して、シオン山、神の鎭居ましますエルサレムの都城へと進み入つた。

かれて耶蘇の噂を聞き、または其教に服し、猶太人、または都に來合せし遠地の者等は、手に〳〵樓欄の葉を持ち、衣を道に布いて、

『ホザナよ、主の名によりて來る者は幸なり』

と神を讃美しつゝ、耶蘇の入京を迎へたのである。まさに是れ紀元廿九年の春深き逾越節前五日の日曜日である。

十四

我等は茲に筆を洗うて愈々最後の悲劇を記す可き場合となつた。先づ耶蘇が捕へらるゝに至るまでの順序を手短かに述べて置かればならぬ。サドカイ人が平素犬猿の間柄であるパリサイ人と與みて耶蘇を捕へむとする動機は前に説いた。パリサイ人が耶蘇を殺さむと欲するは、耶蘇が神の權威を以て語り彼等の信仰傳説を無視するより起つた反感であること既に分つてゐる。唯だ彼等が耶蘇を捕へ

んとして常に躊躇せざるを得ないのは人民の意向である。此時逾越節の爲に遠くペレア、ガリラヤ地方から上京して居る者も澤山ある。是等の中には嘗つて耶蘇の教を聽き其の行を見て彼に信服して居る者尠からずある。耶蘇一人を殺した爲めに是等の者一時に騒ぎ立つは、パリサイ人は勿論、事なかれ主義のサドカイ連中の最も怖るゝ所である。耶蘇入京の翌日、神殿の庭に賣買する商賈の群を一掃した時、彼等が拱手傍觀したのも是が爲めである。其の翌日耶蘇が神殿に於て教を垂れゐし時、汝何の權威を以て此等の事を爲すかと詰り問ひ乍ら、機智に富める耶蘇の答を得たまゝ敢て手を下さなかつたのも此が爲めである。されば耶蘇は危險を前に控へつゝ猶ほ多くの教を此際になす事を得たのである。馬太傳廿一—廿三章に含まれたる樣々の教は此の時に語られたものと見て大差ない。

斯くては民心いよ〳〵耶蘇に歸するばかりである。反對黨は謀議して耶蘇の失言を捕へて之を口實に彼を陷れんと企てた。先づ第一に此役目に當つたはヘロデ

黨の者共である。彼等は耶蘇の許に來つて、針を隠して面に笑をたゝえつゝ問ひ試みた。

『師よ、我等汝の言ふ所教ふる所は正しく且つ偏らず、誠を以て神の道を語り給ふと知る。然れば我等に教へ給へ、貢(みつぎ)をカイザルに納るはよきや否や。』

耶蘇は早くも彼等の悪計を悟り、機智を以て之に應じた。デナリ一箇を取り寄せて其の刻まれたる像は誰かと問ひ、「カイザル也」との答を待つに遲く、

『然らばカイザルの物はカイザルに歸し、神の物は神に歸すべし。』

と答へたので、羅馬帝への謀叛者にせんとした彼等の計企はおぞくも失敗に終つた。

次に同一の衝に當つたのがサドカイの連中である。彼等は元來猶太教の蘇生の教理を信ぜぬ輩である。さるに此時は平素の信仰はどこへやら、口を拭うて言葉やさしく耶蘇に問うた。

『師よ、モーセ我等に書き遺して、若し人妻あり子なくして死にたらば其の兄弟その妻を娶るべしと。茲に七人の兄弟あり、長子妻を娶り子なくして死に、第二、第三、七人の兄弟みな此の婦を娶りたれど子なくして死に、終には婦も死れり。さらば蘇生の時此の婦は誰の妻となるべきか。』

『此世の子は娶り嫁ぐことあれど、彼世に入り死より甦るに足る者は娶り嫁ぐことなし。是れ天に在る使と均しく復生の子にして神の子なれば也……。夫れ神は死にし者の神に非ず、活ける者の神なり。』

是れまた耶蘇が明快に答へたので彼等は其まゝ引き下がつた。最後にパリサイの徒、耶蘇が言ひ誤らずにサドカイ人を説きふせたと聞き、さらばとばかり彼の許にやつて來た。殊に律法に精通(くは)しき教法師の一人質問して曰ふ、

『師よ、律法(おきて)のうち何れの誡か大なるや。』

耶蘇は言下に澱まず答へた。

『汝心を盡し精神を盡し意を盡して主なる汝の神を愛す可し。是れ第一にして大なる誡なり、第二も亦是れに同じ、己の如く汝の隣を愛すべし。凡ての律法と預言書は此の二つの誡に由るなり。』

さすが反對黨の輩も此後は問ふ事をやめた。

十二使徒の一人にイスカリオテのユダなる人物がゐた。彼の性格と行動は今なほ不可解の雲にとざされて居る。彼は耶蘇一行の財嚢を保管する者であつたが、折り〳〵其の共有財産より金錢を掠めたと使徒の一人ヨハネが記して居る所を見ると、他の使徒等から遠けられてゐたと思はれる。また現世的救世主を耶蘇に期待する點に於て、ユダは恐らく多くの弟子中の最たる者であつたらう。彼が耶蘇に隨伴したのも斯かる考からして、耶蘇に隨ひたれば軈て神國の實現せらるゝ時己れも名譽ある一位置を占め得ると思ふた爲めかも知れぬ。此の見方からして一派の人々はユダの反逆を下のやうに解釋してゐる。卽ちユダが師を敵に賣つたのは耶蘇を眞に非凡の救主（メシヤ）と考へたからで、我れ彼を敵に渡さば神の子たる彼は異常の力を現はして一擧に敵を滅盡し神國は立ちどころに現出せむ、若しまた彼れ異常の力を現すこと能はずして空しく敵の手に死するならば、彼はまさしく天下の大欺瞞者にして十字架の最後は自業自得なるべしと、か樣な考から結局何れの結果に出ても耶蘇を敵に賣つて差支ないと思うたのだと云ふのである。此の推察が當れるか何うかは知らぬ。何れにせよユダの人物が不可解であると共に、彼が其師を賣つた動機も千古の疑問である。我等は矢張彼も亦秘密なる運命の子として、神秘家ヨハネと共に「サタン彼の中に入れり」として置く。

水曜日の晝、神殿（みや）の入口にレプタ二つを捧げし貧婦の業を稱したる耶蘇が、殿に入りて教をなし、更らに使徒ピリポの紹介によつて彼の許に來りし一希臘人に、つら〳〵永生の福音を說いて居る間に、彼に對する詭謀は蔭（かげ）に於て其の黑き手を擴げた。此日民の長老、パリサイ人等祭司長カヤパの邸に集りて耶蘇を捕へむ議

を凝した。併し明夜に迫る祝祭に彼を捕ふるは民の中に亂起らむ恐れあり、若かず祝祭をはり人散じた後はと、熟議やゝ延期説に傾いた所へ、入り來つたはイスカリオテのユダである。彼れ口を極めて耶蘇の非を罵りガリラヤ人の無力を説く。集る議員、耶蘇直參の使徒より裏切る者出づる上は、萬に一の失敗あらじ、明日をも待たで召し捕へよと、茲に凝議忽ち一決し、ユダは三十銀を報酬に彼の任務を果すべく約束した。

最後は近づいた。明くる木曜の夕べ、耶蘇は城下のとある家の二階座敷に愛する十二人を呼びて最後の宴を張つた。此時耶蘇自から手巾を腰に、盥の水に十二人の足を洗うて先づ謙遜人に役せらるべきを教へ、偖て晩餐の席に就いて憂を帶びし面色、食しながらに最後の教を垂る。聽く者愁然とせざるはない、殊に我を賣る者此の中に在りと言はれた時は、使徒たち俄かに我が座下危き心地して、互に顏見合はせて誰なる乎と疑ふ。耶蘇は既に萬事を知悉し覺悟してゐる、ユダの

心と行は鏡に映して見る如く彼の胸に反照してゐる。彼れ一撮の食物に物を濡けて反逆者に與へ、やゝ叱したる聲して、

『汝が爲さんとする事は速かに爲せ。』

と言ふ。十一の使徒は何の意なるか、或は會計ユダは何ぞの買物に使するならむ位に考へてゐたが、反逆者の胸中は愕然たるものがあつたであらう、意を決して直ちに外に出でた。

今日基督教會にて行ふ聖晩餐式は此折の晩餐に起因してゐる。耶蘇此の時一塊のパンをとり、祈りて十一人に裂き與へ、また葡萄酒滿ちたる告別の杯を飲みまはし、是ぞ汝等の爲めに捨つる我が體、流す所の我が血なると告ぐ。此夜宴を徹して彼等一行は此數日間の假りの宿なる橄欖山に歌うたひながら往つた。

ニサン十三夜の月は橄欖の下葉を通して一行十二人の顏を青く照した。森の下道踏みつゝ、太き根に腰かけて、耶蘇は樣々の告別の教をなし、また祈をなし

た。約翰傳十三章以下十七章の教訓と祈禱は此の夜鳥啼く樹林の陰にて爲された
のである。斯くて一行は更に滝を遶るケデロンの溪流を渉つて常に好んで往きし
ゲッセマネの園に這入つた。

其の時耶蘇は迫手の既に近づくを豫知して居る。彼は捕へらるゝ前に今一たび
天父に至誠の祈を捧げんと欲した。彼は弟子に暫く監守し居れと命じ、ペテロ、ヤ
コブ、ヨハネを伴ひて少しく前に進み、更に三人を殘して最後に及んで惑はぬ樣
祈れと命じ、獨り大樹の根に伏して悲痛の禱を天に訴へた。——

『若しかなはゞ此時を去らせ給へ。アバ父よ、汝に於ては能はざる所なし、此
の杯を我より取り給へ。されど我が欲ふ所をなさむとするに非ず、汝が欲ふ所に
任せ給へ……。』

夜深くして、使徒たちは晝の疲れ堪へがたく其場に眠つて了つた。耶蘇一たび
歸つて彼等を呼び醒まし、再び入つて蠱きの如く祈ること暫時。汗、血の滴りの

如く地に落ちたと書いてある。祈禱をはりて先の所にかへり、再び弟子達の眠る
を見て、

『また眠るか、惑に入らぬ樣祈るべきに。されど時は至れり、いざ我等往かむ、
我を賣る者近づきたり。』

此の言葉が終るか終らぬうち、かれて場所を知るイスカリオテのユダは劍と棒
を携へた兵卒を連れて此園にやつて來、今自分が接吻をする者は耶蘇ぞと諜し合
はして、兵卒を待たせて一人進んで來た。炬火と提灯。劍戟の光は樹間に動いて
をる。耶蘇の鋭き眼光は早くもユダを射た。

『ラビ、安きか。』

嗚呼、斯く言ひつゝ反逆者は愛の象徴たる接吻を師に試みて遂に主を賣つたの
である。耶蘇は兵卒の進むを待たず自若として其れに進み出た。

『汝等誰を尋ぬる乎。』

『ナザレのイエスなり。』
『我は其れなり。』
耶蘇の泰然たる樣に兵卒は地に畏伏した。
『誰を尋ぬる乎。』
『ナザレのイエス……。』
『我既に汝等に我は其れなりと言ひたり。汝等我一人を求むるならば此の輩(使徒)を許して去らしめよ。』
使徒たちは散つた。耶蘇は縛せられて兵卒に引かれた。塒に息む森の鳥は時ならぬ夜の響に聲を擧げて啼いた。

十五

審判は深夜直ちに祭司長の庭内に開かれた。祭司長を中心にサンヒドリンの議

員、學者(パリサイ人)たちずつと居列ぶ。中庭には兵卒、僕ども火を燒いて暖をとり、此處まで隨ひしペテロも亦火に煥まつてゐた。
訊問は開始された。議員等連りに耶蘇を死刑にすべき罪科を擧げむと心がけたが更にない。耶蘇を憎む者等樣々に言ひこしらへるけれども皆な區々として讒訴する所少しも符合しない。斯くてはと祭司長カヤパは直接耶蘇に問ひ始めた。
『是等の人々の汝に立つる證據は如何、汝答ふる所なきか。』
默然たる耶蘇を見てカヤパは更に言葉鋭く聞いた。
『汝はキリスト、神の子なるか、我れ汝を活ける神に誓はせて言はしめん。』
確く結んだ耶蘇の口は開いて、鐵の如き信念の聲カヤパの耳朶を擊つた。
『然り。我汝等に告げん、人の子大權の右に坐し、天の雲の中に現れ來るを汝等見るべし。』
猶太教によれば自ら神の子とする如きは此上なき冒瀆の言である。身苟くも猶

太教の最高位にあるカヤパ、自分が侮蔑されたかの如く感じ、憤然一座を見廻して叫んだ。

『我等また何ぞ外に證據を求めんや。此の褻瀆たる言は汝等も聞く所なり。汝等如何に思ふや。』

彼等はこぞりて罪さまさに死に當ると陳べた。併し人を死刑に處する最後の權利は羅馬政府の握る所〻ある。サンヒドリンの議員は方伯ピラトの承認を經ればならぬ。彼等は耶蘇を嘲罵し、唾きし、面を擊つて夜の明くるを待つた。

翌くれば金曜日の朝、エルサレム城内幾萬の市民逾越の祝祭に忙はしき時、耶蘇は引かれて羅馬公廳ピラトの邸に至つた。議員等は祝祭の前に異邦の公廳に入ると身汚ると稱して中に這入らずに、入口に於て耶蘇をピラトに訴へ、巧みに彼の怒を招く如き口實を構へて言うた。

『此人は民を惑はし、稅をカイザルに納むる事を拒み、自から王なるキリストと稱せり。』

ピラトは耶蘇を一〻公廳内に呼び入れて聞く、

『汝は猶太人の王なるか。』

『我國は此世の國に非ず、若し然らば我が僕我を猶太人に渡さゞる爲めに戰ひしなり。されど我が國は此世の國にあらず……。』

『然らば汝は王なるか。』

『然り我は王なり。我これが爲めに生れ、これが爲めに世に來れり。即ち眞理に就て說かんが爲めなり。』

ピラトは耶蘇の王なる意味を了解し、出で〻猶太人に言ふ、

『我れ此人に罪あるを見ず。茲に一つの例あり、我れ此逾越節に毎年一人の囚人を許すこと〻せり。汝等此人を許さむことを願はざるや。』

『否な此人にあらず、バラバを許せ、バラバを許せ。』

ピラトは到底此場で猶太人に事理を悟らす事が出來ぬと悟り、耶蘇に相當の笞刑を加へて一と先づ熱したる彼等の心を鎭めた後徐ろに彼を許さんと考へた。依つて番卒に命じて棘の冕(かんむり)を耶蘇の頭に戴かせ、紫の袍衣を着せて耶蘇を外に引き出して猶太人に言うた。

『我れ此人に罪あるを見ず……。』

言ひも果てず猶太人一齊に「十字架に付けよ、十字架に付けよ」と叫ぶので如何とも仕方がない。暫時してピラト飽く迄躊躇すると見たる議員の一人は更に突つ込んだ。

『汝若し彼を許さばカイザルに忠臣ならず、そは自己を王とする者はカイザルに叛く者なれば也。』

ピラト止むを得ず耶蘇をガバタに引き立てゝ愈々審判の座に据る。猶太人再びピラトを促す、

『十字架に釘けよ、十字架に釘けよ。』

『我れいかで汝等の王を十字架に釘けんや。』

『カイザルの外われらに王なし。』

ピラトは遂に耶蘇を十字架に釘ける事を許し、祭司長、議員等に彼を渡した。

ニサンの月十四日は猶太人の大祭日で、全國より集り來る猶太人は皆な犧牲の小羊を神殿の庭の聖壇に屠つて彼等が罪祭の献物とするのである。されど此日更に大なる萬民の爲めの罪祭の献物がエルサレム城外なるカルヴリー丘上に其の犧牲の血を流したのである。

春草滿地を掩うて風そよぐ丘上に三基の十字架は据ゑられた。耶蘇眞中に、其左右に二人の盜賊釘けられた。兵卒どもや猶太人は架上の耶蘇を罵つて言うた、『殿を毀ちて三日に之を建つる者よ、汝若し神の子ならば自からを救へ』と。遙かに隨き來りし婦人たち、耶蘇の母などは釘うたれし手足より滴る血潮を見て如何ば

かりか心を痛めたであらう。家を出でゝ三年、野に臥し山に祈り、故郷人に狂者と呼ばれつゝ、東西に奔走した耶蘇も、現在生母マリアの歎く姿を見ては魂も消えるばかり、恰も此處まで隨ひ來りし愛する使徒ヨハネの姿を認めて、之に愛母の後事を托した。

耶蘇の死苦は晝の十二時より凡そ三時間ほど繼續した。耶蘇は最後に「事をはりぬ」と述べて靜かに靈を天にわたした。まさに是れ紀元廿九年の春、猶太曆ニサンの月の十四日は、我が新曆の春季皇靈祭後に來る滿月の前日に當るのである。

* * * * *

日暮れてアリマタヤのヨセフと言ふ、かねて耶蘇の教に歸依してゐた一富人がピラトに往つて屍を十字架から取り下し、近頃新に掘つた己が墓に葬ることの許可を願ひ出た。猶太の墓は土下に孔を穿つて埋めるのではなく、丘腹に人の自由に出入出來る程の大きな横洞を掘つて、其の最奥に屍體を寢せて置くのである。

今ヨセフは自己の爲めに用意しておいた立派な墓所を耶蘇の爲めに提供したのである。彼と數人の信者たちは耶蘇の屍體を猶太人の例の通り丁寧に布に包んで香を塗り、靜かに土の香高い新墓の奥に横へた。後は羅馬の兵卒等、或は信徒等夜耶蘇の屍を盜みやせんと、石の重い戸を閉して代る〳〵入口を警衛する事となつた。

翌くる日、猶太人の安息日(土曜)は事なく濟んで、日曜のあした、さすが篤き信徒たちの師に對する心情は濃かである、嘗つて七の惡鬼を追ひ出されたるマグダラのマリアを頭に、數人の婦人たち香料を用意して墓所を訪れると、驚く可し師の屍は見えずして二人の天使の白き姿を見るばかりである。かくて耶蘇は實に三日目の朝復活したのである。彼れは復活してマリアに現れ、ペテロとヨハネに見え、エマオ途上の二人と物語り、後に十二使徒に屢々現れて彼等の信仰を固め、眞活の靈體もて四十日を此の世に過したのである。自分は今茲に基督復活の虛實

を論ずる意志はない。唯だ聖書の傳へを其まゝ記すのみである。蓋し、「基督復活せずば十字架の教は我等に益なし」とは、最初の目擊者、初代信徒を通じての動かす可からざる信仰であつた。

エルサレムの東橄欖山につゞくガリレイの小さき峯は基督昇天の場所と傳へられてゐる。耶蘇は此處に十一人の使徒を招き、萬國に往きて福音を傳ふべきを命じて彼等を祝するや、耀雲忽ち天に起つて彼の身體を擧げ、仰ぎ立つガリラヤ人を下に雲遂に之を見えざらしめたと記されてある。

以上はナザレの耶蘇(いはす)が短かき、さりながら特異なりし生涯のあらましである。絶えず實見者の態度を以て福音書を書いた使徒の一人ヨハネは、其の書を結ぶに下の句を以てしてゐる。『此書を錄せるは汝等をして耶蘇の神の子基督なる事を信ぜしめ、之を信じて其名によりて生命を得させんが爲めなり。』

第三章　耶蘇の自覺及び所教

基督教の中心は耶蘇基督其れ自身である。隨つて基督傳を編む者は、たゞ耶蘇の表面に現れた生涯や所教を記すのみでは未だ基督教の開祖を描いたとは言はれない。我等は此書を終る前に、許す限りの簡單な程度に於て一わたり耶蘇の內部の意識——自覺に就て述べて置かねばならぬ。

耶蘇の意識のうち最も強く深く占めた思想は「我は神の子なり」てふ一箇の自覺である。彼がヨルダン河畔に洗禮を受けた時、天に聞いた聲は實に、「此は我が心に叶ふ我が愛子なり」と云ふ一句である。福音書を精しく調べた人は、耶蘇が神を呼ぶに常に「我が父」または單に「父」なる稱呼を以てして、決して「我等の父」なる語を用ゐず、他の弟子または一般人のためには「汝等の父」なる語を當て用ゐて居る事を發見するであらう。(「天に在ます我等の父よ」の祈禱句は弟子等に祈る

べき語を敎へたので、彼自身の祈ではない。)是は明かに耶蘇が自分と神との特殊な個人的關係を言ひ表さんとした用意に外ならない。彼はまさに自分は常人とは全く異る「神の獨子」と云ふ自覺を抱いてゐたのである。

耶蘇が神に對して、此の親しい天父の感情を抱いたは恐らく洗禮の時以前からであらう。ナザレの故村に、美くしき自然に親しみながら彼は無限の思を天父の懷に寄せたであらう。十二歳のをりエルサレムに殿詣でして歸るを忘れたる時、其の父母に答へた言葉——「我は我が父の家に居るべきを知らざるや」——は少年耶蘇の心內の消息を語つてをる。斯かる自覺に充ちた彼であつて始めて、「父の外に子を識るものなく子の外に父を現すものなし、父は萬物を我に賜へり、」と云ふ樣な確信の言を吐く事が出來るのである。重ねて言ふ、耶蘇が神を父と呼んだのは、弟子達に天父の思想を鼓吹したのとは場合が違ふ。

既に基督は天父の獨子である。子は父の業をなすは當然である。若し此世の人

に神國を與ふるが神の旨とすれば(路十二章卅二)、神の獨子はまさに此の目的を遂ぐるために此世に遣はされた者であらねばならぬ。茲に耶蘇の救主なる觀念が生じてくる。耶蘇は先づ我は何者であるかとの意識から、彼の目的を自覺したのである。言ひ換へれば使命の自覺が神子の自覺を產んだのでなくて、神と彼との間に個人的に結ばれた父子の觀念が使命の自覺となつたのである。實に「我が父の業をなす是れ我が糧なり」と言ふのが耶蘇本來の面目である。

既に耶蘇は救主の自覺を得てをる。然らば耶蘇の救主觀念は如何云ふものかを考へて見ねばならぬ。思ふに耶蘇の救主思想と聲息を通ずるものはかの以賽書中に存する有名な「神の僕」歌であらう。耶蘇は舊約此かた信ぜられたる猶太的救主觀念を極力打破したが、彼さながらの人格的表現を右の詩歌に歌はれた「神の僕」の人格中に見出したのである。今左に右の歌の一部を記すは耶蘇の思想を理解する上に於て無益の業であるまい。

一、

我が僕(しもべ)を見よ、彼は我が扶くる者、
我が選び人、我が心喜ぶものなり。
我れわが靈を彼に與へたり、
彼れ萬民に道を示さん。

彼は聲高く叫ばず、吼えず、
其の聲を街頭(ちまた)に聞えしめず。
傷める葦を折ることなく、
ほのくらき燈火を熄(け)すことなし。
至誠(まこと)をもて彼れ道を示さん、

彼は衰へず、喪膽(きおち)せざるべし、
道を地に立てをはるまでは——。
かくて諸々の島は法音を待ち望まん。

二、

彼は侮られて人に捨てられ、
悲哀の人にして病惱(なやみ)を知れり。
顔を掩ひて避くる醜人のごとく——
蔑まれぬ。我等も彼を尊まざりき。

されど彼こそ我等の病惱を負ふなれ、
彼こそ我等の悲哀を擔ふなれ。
然るに我等思へり、——彼はせめられ、

神にうたれて苦めらるゝなりと。

我等はみな羊の如く迷ひ往けり、
おの〳〵己が道に向ひゆけり。
然るに神は彼の上に負はせ給へり、
我等の凡ての背戻不義を——。

以賽書四十二章一—四、五十三章三—六(前後省略)

此の歌は耶蘇の幼時より愛誦したものゝ一であらう。既に神の愛子、神の喜ぶ者と信じたる彼は、萬民に道を傳ふる事こそ我が使命なれと感じたのである。而して至誠を以て、不撓不屈、最後まで傳敎の爲めに奮鬪したのである。耶蘇の此の決心と勇氣とは不用意に記されたる福音書の記事中に屢々我等が發見し得る所のものである。而かも此の使命を果たす者は此世に於て失敗の人でなければならぬ。彼は侮られ蔑まれて人に捨てらるゝを最初より覺悟してゐた。彼は常にエルサレムに於て受くべき悲慘なる最後を弟子達に語り聞かせたのである。而かも此の悲哀の人にして始めて人の悲哀を慰め得べしとは彼の信念である。彼が多くの病者跛者を醫したことは彼の心中を外に表したものである。「健かなる者は醫者の助を求めず、我は病ある者を癒さん爲めに世に來れり。」「凡て勞れたるものまた重荷を負へる者は我に來れ、我れ汝等を休ません。」と云ふのが基督の使命に對する自信である。而して此の信念の最も高潮に達するものは實に

『多くの人に代りて生命を與へ、其の贖とならん爲めなり』(太廿章廿八)

と云ふ耶蘇の言葉である。而かも此の思想もまた「神僕の歌」の終に發見さるゝものである。卽ち、

されど神は喜びて彼を碎き給はん。
彼を罪の供物として與ふれば、

彼は其の裔を見、長き日を見ん、
而して神の樂み彼の手のうちに得られん。

之を要するに、耶蘇内部の意識は神子の自覺に始まり、ついで使命の自覺となり、此の使命を果す爲めに多くの苦楚を經べく、而かも此の苦痛——死に由つて萬民を救ふと考へたのである。彼は此の信仰を以て道を傳へ、此の自信を以て十字架の最後を甘受したのである。而して初代信徒は如是耶蘇を信仰して基督と稱へたのである。

耶蘇が神を明かに活きた實在者と見做した事は多く論議を須つまでもない。當時の猶太教に於てもまた神を實在者と見做した。併し彼等の神はイスラエル國土の運命と離す事の出來ぬ神である。隨つて耶蘇在世當時の如く國家全く滅びた際には漫漶たる神の活性が多少薄らがざるを得ない。加ふるに、イスラエルの不信

の爲めに遠かりたる神の恩惠を挽回するには神の律法を缺なく實行せざる可からず、一も二も律法主義に立てる籠つてゐる當時にあつては、勢ひ神は律法の背後に押しやられて其の活きた働きが表面に現れて來やうがない。是れ當時の猶太教よりも王朝時代の信仰の方が遙かに神の實在性を強く現はしてゐた所以である。

然るに耶蘇にとつては、神はすべての律法的籬垣を徹して直ちに眼前に迫つてゐる實在者である。彼が殆んど手に取る如く「神の國」の教説を試みたのも此の理由に基く。其は決して將來の希望ではない。現在既に到達しつゝある事實である。神は既に彼の心中に活在してゐる、神の國の到來は一絲の疑を挾まぬ差し迫つた事實たらざるを得ぬ。彼は神の中に活き、其中に呼吸して居る。彼の生活に於けるる悉くが宗教である。故に彼の凡ての教は神を中心として出で、凡ての言は直ちに聽者の心をして神に向はしめる。如何なる困難の際にも彼の最後の避所は神である。彼は絶えず神の聲に聞いた。彼の生活、彼の行爲、彼の言説、すべては此

の最後の標的に向つて走り、此の中心點から放射して居るのである。

耶蘇の神は靈的の人格的實在者である。「神は靈なれば拜する者もまた靈と眞を以て拜さなければならぬ。」彼は常に神と靈的に交通してゐた。彼によれば神殿に於てする犧牲祭などは決して神に接近する方法でない。神は碎けたる靈を求めて燔祭を喜ばないのである。耶蘇の神國は此世の國ではなくして靈界の國である。神と其の事業に對する耶蘇の思想、方法、形式悉く物質的ならずして精神的のものである。而して此の靈的存在者は偉大なる全能力を具備し給ふ人格者である。「父に於ては能はざる所なし。」一たび神の意動けば此の山を移して彼の海に入れと云ふもまた能ふのである。舊約に於て教へられたる全能の神、威嚴の神はまた耶蘇の神であつたのである。

併かも此の稜威雷の如き神を和げて、無限の愛に富み給ふ天父と觀た所に、耶蘇獨特の神が現されてゐる。耶蘇の教説、比喩談の多くは此天父の愛を語つてゐ

る。野に咲く草花、空に謳ふ鳥、悉く此の天父の美を示してゐる。倉忙として絶えず危險と始終した三年の傳教生活に、猶ほ一抹平和の氣を漂はせたのは實に耶蘇の此の思想によるのである。彼は此の思想を常に弟子の心に注入する事に勉めた。是れ使徒ポーロを始め多くの教徒が、如何なる迫害の下や悲慘の境遇にありても感謝の生活を送るを以て基督者第一の德となした所以である。蓋し神を天父と呼ぶより大なる感謝の泉はないからである。

耶蘇は弟子に天父の神を説くと共に絶えず自己を説いた。前に述べた如く、彼は自己を神の獨子なりとし、萬民の贖の爲めに遣はされたる救主なりと信じた。「人若し渴かば我に來りて飲め、活ける水川の如く我より流れ出でん、」「我に就る(きた)ものは死なず、我を受くるは父を受くるなり」と、凡そ斯くの如き語は皆な耶蘇自身の人格に就ける教説である。所詮耶蘇の教の凡ては神と基督——父と其の獨子なる二大中心點に鍾まつて居ると云うて差支ない。

神と其子を説いて是が信仰を勸めたのが耶蘇の教の眼目とすれば、他の道德的教訓などは抑も末である。耶蘇の教は決して倫理説として一の體系を備へて居るとは言へない。或る點に於ては極端に過ぎると思はるゝふしさへある。是れ彼に於ては道德は第二義的のもので、唯だ其の時代を警告したものに外ならぬが故である。卽ちパリサイ主義の形式道德を排斥して極力精神的の道德を勸めたのに外ならぬ。

彼は一々些細な道德上の教をなさずして、直ちに其の中心的なる原理を掲げて時人に示した。敬神愛人は彼が道德の根幹である。神の國と其の義しきを求むるが人としての第一の義務である。己れ人に爲られんと思ふ事を人になすが人相互間に守らるべき根本の道である。彼はパリサイ人を目して、人の誡(彼等の傳説)を守りて律法となすも、義と信と仁と其うちになしと云うてゐる。そしてパリサイ人の義しきよりも汝等の義しきこと勝れずば神の國に入ること能はずと警告してゐる。其他多くの道德上の教が福音書に記されてあるが、皆なパリサイ人に對してなされた時代の教と見れば解し易いと思ふ。彼の「汝の敵を愛せよ」とは、パリサイ人の何々す可からず、何々する者は何の罰を受く可しと言ふ樣な誡律的な消極的の教に對して、積極的の道を説いたものと見ればよい。

所詮耶蘇三年の宣教の中心題目は道德に非ずして、永生にある。「人若し全世界を得るとも其の生命を失はゞ何の益あらんや」とは耶蘇所教の精神である。而して「永生とは唯だ獨の眞神と其の遣しゝ耶蘇基督を識る是れ也」と云ふ一句が、耶蘇所教の根本題目を遺憾なく現してゐると思ふ。

耶蘇基督 終

大正三年十二月廿七日印刷
大正三年十二月卅日發行

定價十錢

發行者　東京市本郷區元町二丁目二十五番地　安藤現慶

耶蘇基督　著者　前島潔

發行所　東京市本郷區元町二丁目二十五番地　日月社

印刷者　東京市麹町區有樂町二丁目一番地　中村政雄

報文社印刷

反響叢書第一編

小宮豐隆氏著　津田清楓氏裝幀

再版

演劇評論

■定價金　壹　圓
■郵稅金　八　錢

自序に曰く――日本の演劇は、其新たると舊たるとを問はず、餘りに一地方的な同時に又餘りに一時代的な藝術である。人は「心の世界」に深入りすることなしに、此窮屈な因循な淺薄な輕佻な倭少な醜陋な天地から普遍と永遠との朗らかな世界へ擺脫することは出來ない。私は私自らを「心の世界」に深入りし得たものだとは決して思はない。然し私はこの世界に深入りすることの價値を深切に認める、同時に私は眞面目に確かに深く精しく凡てを心理的に考察するといふことが、此深入りへ正しく道つけるものであると云ふことを信じて疑はない。

反響叢書第二編

新刊

平塚明氏著　伊藤野枝　岩野清女史序

現代と婦人の生活

■定價金八十五錢
■郵稅金　八　錢

▲婦人評論界の最高權威

現時の思想界に於て、著者平塚女史の如く大膽に然も深刻に生活の自由を叫ぶものはあらず。所謂「新しい女、醒めたる女」の主唱者として、著者の緊縮せる生命力は、今や正に思想問題の燃點となり、新人生活の暗示をなしつゝあり。見よ著者が一度戀愛の自由と個性の權威を宣告するや、愚昧の俗衆は卑俗の嘲笑をあびせ、傳守的爲政者はあらゆる威壓と迫害とを加へたりき。新しき自覺者は是非共本書を讀め、婦人を論ずる輩も是れを讀め、然して新教育と新宗教に目醒んとする徒輩も又正に本書を讀まざる可らず。

新宗教の暗示

現代百科文庫

宗教叢書

各編拾錢均一

既刊

神道綱要　西川光次郎
カラマゾフ兄弟（上）　ドストイエフスキイ　森田草平
カラマゾフ兄弟（中）倍冊　ドストイエフスキイ　森田草平
大聖釋尊　江部鴨村
しやくんたら姫　森田草平
高僧と母　カリダーザ　江部鴨村
教徒として見たる天理教　廣池千九郎
俳聖芭蕉　岡本默骨
救世軍　西川光次郎

近刊

續高僧と母　江部鴨村
カーライルの宗教　淺海琴一
カラマゾフ兄弟（下）倍冊　ドストイエフスキイ　森田草平
近代思想と宗教　柏原祐義

一流の評論創作

現代百科文庫

文藝思潮叢書

各編拾錢均一

既刊

父と母と娘（小説）　森田草平作
無用語（評論）　安倍能成著
三十三の死（小説）　素木しづ作
文藝評論（評論）　小宮豊隆著
杏の落ちる音（小説）　高濱虛子作
銀座の夜（小説）　小宮豊隆作
藝人と藝術家（評論）　生田長江著

近刊

蠍（さそり）（脚本）　眞山青果作
神秘と半獸主義（評論）　岩野泡鳴著
人間的文學（評論）　森田草平著
一から四まで（小説）　河東碧梧桐作
新道德、觀（評論）　伊藤證信著

東西名著眞髓

現代百科文庫

梗概叢書

各編拾錢均一

既刊

神曲　ダンテ　森田草平編
ベルグソン・の哲學　生田瓦平編
懺悔錄　ソルボツ　生田長江編
マヂム・ボワリー　ペロルオ　相馬御風編
英雄崇拜論　カーライル　中村古峽編
ドリアン・グレー　ルロイド　相馬泰三編
決鬪　リクーンブ　橋田東聲編
春の眼ざめ　ウエキンド　生田長江編
武器と人　シロウ　福永挽朝編
ポラ　ピネロ　加藤朝鳥編
オルレアンの少女　レシルル　水上齋編
アルネ　ビヨンソン　中村吉峽編

■三宅花圃女史序　■西川文子女史跋
■平塚雷鳥女史跋　■與謝野晶子女史跋

新刊

高島米峰

店頭禪

■四六版三百餘頁
■定價八十錢
■郵稅八錢

△著者自序―禪坊主の禪にもあらず、野狐禪の禪にもあらず、語默動靜皆これ禪の禪なり。僧堂の禪にもあらず、學林の禪にもあらず、丙午出版社の張場格子裏に、獨り自ら、實參實究したるところの禪なり。傳統の禪にあらずして、創造の禪なり。即ち予が生活の實驗なり、信仰の告白なり。

内容要目

△藝者を論ず　△世界の慘禍
△無病長生論　△獨立とは何ぞや
△不安の生活不斷の努力　△佛基儒敎の將來
△國民道德と政界△夫と妻の不品行
△現代新聞論　△「圓窓」を讀む
△發賣禁止の効果△不眞面目なる博士會

278
112

政治文藝雜誌

反響

一冊廿錢
郵税一錢

毎月一回
一日發行

主幹
生森 田田 長草 江平

執筆諸家

生江馬橋安江後岩生沼與伊岩
田部場田成口藤野田波謙藤野
長鴨孤東貞　末清春瓊野證泡
江村蝶聲雄渙雄子月音寛信鳴

森安田青德佐伊村素平野小阿
田藤村森田藤藤田木塚上宮倍
草枯松微秋春野たし明臼豊能
平山魚風江夫枝まづ子川隆成

●文藝思想界の最高權威
●政治宗教界の新暗示
●評論界の高等批評
●創作界の清新なる傑作

東京市本郷區西須賀町二　反響社

終